

## 【国外事例】

### 掲載事例一覧

No	都市公園名称	所在地	位置づけ	管理者	頁
01	フリーウェイ・パーク Freeway Park	アメリカ合衆国 シアトル市	市管理公園	シアトル市	205
02	ガスワークス・パーク Gas Works Park	アメリカ合衆国 シアトル市	市管理公園	シアトル市	211
03	ローズ・ケネディ・グリーンウェイ (チャイナタウン・パークほか) Rose Kennedy Greenway	アメリカ合衆国 ボストン市	州立公園	ローズ・F・ケネディ・ グリーン管理組合	215
04	ガントリー・プラザ・ステート・パーク Gantry Plaza State Park	アメリカ合衆国 ニューヨーク州	州立公園	ニューヨーク州	221
05	サンアントニオ・リバーウォーク San Antonio Riverwalk	アメリカ合衆国 テキサス州	市管理公園	サンアントニオ市	225
06	ベルシー公園 Park de Bercy	フランス パリ市	都市緑地ゾーン	パリ市	229
07	アンドレ・シトロエン公園 Andre Citroen	フランス パリ市	都市緑地ゾーン	パリ市	233
08	バスターニユ公園 Promenade Plantee	フランス パリ市	都市緑地ゾーン 歩行者道	パリ市	237
09	エムシャー・パーク (デュイスブルグ北景観公園ほか) Emscher Park	ドイツ連邦 ノルトライン・ヴェスト ファーレン州	景観公園	ルール地域連合	241
10	ハグレイ・パーク Hagley Park	ニュージーランド クライストチャーチ市	レクリエーション 保留地 オープンスペース 2	クライストチャーチ市	245



01 フリーウェイ・パーク Freeway Park	(位置づけ)市管理公園	(所在地)アメリカ合衆国
	(管理者)シアトル市	／シアトル市

特徴	●高速道路上部利用による地域分断の回避と美しい景観の保全 市の中心部に建設された高速道路を跨ぐように人工地盤上の公園を配置し、市中心部一帯における美しい景観の保全にも寄与した。	
隣接施設等の種類と名称	高速道路	インターステート5 (Interstate 5)
立地環境	中心市街地 (周囲に居住区、商業地区、ビジネス街等が存在)	

### 隣接施設等との一体化・連携の概要

#### ◆ 1 計画・整備段階における高速道路との連携：

ランドスケープ・アーキテクトのコーディネイトによる市民意見を取り入れた計画・設計

【空間確保レベル・境界処理レベル】

高速道路による地域分断を回避するため、高速道路上に公園を設置するという市民の発案を取り入れ、高速道路管理者との合意のもと、市、州、そして市民らの連携により、公園が実現した。



フリーウェイ・パーク

高速道路 (Interstate5)



①フリーウェイ・パークから見た高速道路

出典) シアトル市ホームページ

連携レベル	骨格形成レベル	空間確保レベル	境界処理レベル	波及効果レベル
連携の段階	配置計画	整備	管理運営	

公園の概要				
所在地	アメリカ合衆国／シアトル市 (700 Seneca St. Seattle, WA, US)			
管理主体	シアトル市 (公園レクリエーション部)			
開設	供用開始年月日	1976年	面積	5.2acre (約 21,000m <sup>2</sup> )
<p>&lt;法的位置づけ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>シアトル市憲章 (Article XI of Seattle City Charter) 第 11 部に基づき設置されたシアトル市公園レクリエーション部が、同憲章により公園管理を行う責務を与えられている。</li> <li>Seattle Municipal Code (SMC) 18.12 (Park Code) により定義された公園として、行為規制等の規定に基づき管理。</li> </ul> <p>&lt;整備方針&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>公園はいくつかのスペース (Naramore Fountain、Great Box Garden、West Plaza、Central Plaza、East Plaza) から構成される。</li> <li>公園へはコンベンション・センター等の周囲のビルから自由に入出りができる。また、公園内に設けられた滝によりマスキング効果 (騒音防止) が図られている。</li> <li>公園の存在により、周辺住民、買い物客、オフィスワーカー、ホテル滞在者など、ダウンタウンを構成するすべての人々にスペースを提供している。</li> <li>コンベンション・センターの隣 (Hubbell Street) に、Freeway Park Garage との名称で駐車場が設置されている。シアトル市が所有、運営しており、約 670 台分の駐車スペースがある。</li> </ul> <p>&lt;主な施設&gt;</p> <p>滝、噴水</p> <p>&lt;利用状況&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>開園当初しばらくは市民に公園の存在意義が認知され、広く利用されていた。しかし、樹木が鬱蒼とし、公園内に十分な明かりが入らなくなり、公園の見通しが悪化すると、公園のネガティブな利用 (ホームレスの滞留、ドラッグ売買) が目立つようになり、一般市民の利用は減少した。</li> <li>2007 年、米国レクリエーション・公園協会 (NRPA) 全国大会のオープニング・レセプション会場として利用された。約 8000 人の来場者が音楽ライブ、飲食、噴水のライトショーなどを楽しんだ。</li> </ul>				

隣接施設等の概要		
高速道路	名称	インターステート 5 (Interstate 5)
	管理者	ワシントン州交通部 (所有者である国道当局の代理で管理)
	延長	2,222.97km

公園・隣接施設等に関わる主な経緯	
1966年	高速道路 (インターステート 5) 完成
1968年	Kings Country の有権者は公園設置の用途のため、334 万ドルの Forward Thrust bond を承認 (うち 64 万ドルがシアトルへ) 同時に、シアトル市は高速道路の上部をふさぐ建設工事のため、州、連邦政府からの資金を確保するとともに、インターステート 5 の環境等への影響を低減するため、駐車場の設置を検討
1969年	州、連邦政府、民間からの基金が承認され、公園計画が実行へ
1976年	7月4日 公園開園
1984年	ピゴット・コリドーまで公園敷地を拡大
1988年	公園敷地を拡大し、ワシントン州コンベンション・センターへ接続
2002年	公園内で起きたホームレス殺害事件をきっかけに、公園の再生の議論が活性化
2004年	Project for Public Spaces (PPS) の下、ステークホルダー会議開催
2005年	公園再生計画 “A New Vision for Freeway Park” 策定

公園・隣接施設等の位置・景観の状況

■位置図



高速道路  
(Interstate5)

フリーウェイ・パーク

出典) シアトル市ホームページ



出典) シアトル市ホームページ

## 連携の内容

### ◆1 計画・整備段階における高速道路との連携： ランドスケープ・アーキテクトのコーディネートによる市民意見を取り入れた計画・設計

#### <連携の背景・きっかけ>

- ・1966年に完成したインターステート5による環境への影響を憂慮した市民グループが、高速道路に“ふた”をし、影響の低減を図るアイデアを提案した。同じ時期に、シアトル市はインターステート5による騒音、大気汚染等の影響低減を図るため、市営の駐車場を設置できる場所を探していた。
- ・1968年、Kings Countryの有権者は公園設置の用途のため、334万ドルのForward Thrust bondを承認した（うち64万ドルがシアトルへ）。また、シアトル市は高速道路インターステート5の上部をふさぐ建設工事のため、州、連邦政府の資金を確保した。
- ・市、群、州、連邦政府、民間事業者、そして多くの市民の協働により、高速道路上へ公園を設置することとなった。
- ・公園の設計を行ったランドスケープ・アーキテクト、ローレンス・ハルプリンは、高速道路という巨大な高架構築物を、景観の中の1つの要素として取り込んだ。高速道路を人工地盤で跨ぎ、その人工地盤の上を公園として活用した。

#### <連携の手法・工夫点>

- ・ランドスケープ・アーキテクトや環境を重視する人々は、高速道路の影響を緩和する役割として公園の意義を主張したが、高いコストや工期の遅れを理由に高速道路の整備主体は公園の設置に反対した。
- ・公園設計段階ではコミュニティ会合が度々開催され、広く意見が取り入れられた。
- ・高速道路上への公園の設置に当たっては、公園を設置する市と、高速道路を管理するワシントン州交通局との間で合意形成が図られた。そして市、群、州、連邦政府、民間事業者、そして多くの市民が協働で公園の実現に取り組んだ。

#### <連携の効果>

- ・市街地を縦走する高速道路 Interstate5上に設置することで、地域の分断を回避。また、市の中心部に遊歩道やエリオット湾への展望、そして緑空間を提供することで、付近一帯の美しい景観を保全した。
- ・Freeway Park Neighborhood Association (FPNA) が1993年に組織され、公園の抱える問題の対応と、公園事業の財源の確保を実施している。夏の音楽コンサートなど、様々な事業に対しFPNAが資金を提供している。
- ・開園当初しばらくは市民に公園の存在意義が認知され、広く利用されていた。しかし、樹木が鬱蒼とし、公園内に十分な光が入らなくなり、公園の見通しが悪化すると、公園のネガティブな利用（ホームレスの滞留、ドラッグ売買）が目立つようになり、一般市民の利用は減少した。
- ・公園内で起きたホームレス殺害事件（2002年）をきっかけに、公園の再活性化の議論が活発となった。
- ・FPNAがNMFより助成金を受けたのを契機に、公園の再生事業がスタート。シアトル市のParks and Recreationはフリーウェイ・パークの調査、評価、そして再生計画の作成を、地元のステークホルダーと協働で行うよう、法人組織Project for Public Space (PPS)に委託した。
- ・市とFPNAはワークショップをたびたび共催し、140人以上が参加。
- ・事業はアドバイザーグループがサポート。グループは、FPNA、市長、Downtown Seattle Association、地元企業、公園周辺のNPO、Seattle Design Commission、Seattle Parks and Recreationなどのメンバーから構成される。事業の成否は、このグループがきちんと機能し、協力して事業を進めることができるかによる。
- ・全体に、市民から寄せられた意見は示唆に富むものが多かった。公園の近隣住民からは公園の再生事業は必要であり、FPNAと市の再生事業を歓迎している旨の意見が見られた。

## ■再生計画 “A New Vision for Freeway Park”

### 計画の目的

- ・公園をシアトル市内の” great ”な場所として再生する
- ・住民、観光客、会社員といったあらゆる利用者のために公園を活性化する
- ・公園の活性化により、シアトル市を年通して住み、働き、そして遊ぶ場所として最適な場所とする
- ・都会のオアシスからシアトル市全域の重要拠点とする

### 再生プラン

ミーティングやワークショップの参加者から、公園の各スペースについて、オープンで快適な空間として整備することなどが提案された（図は、3つのスペースにおける再生イメージの例）



Convention Centre Plaza



Pigott Corridor



Park Place Plaza

出典) “A New Vision for Freeway Park”

### <参考文献>

- ・シアトル市ホームページ ([http://www.seattle.gov/parks/park\\_detail.asp?ID=312](http://www.seattle.gov/parks/park_detail.asp?ID=312))
- ・シアトル市ホームページ (<http://www.seattle.gov/parks/maintenance/freewaypark.htm>)
- ・“A New Vision for Freeway Park” –Project for Public Space
- ・HistoryLink.org ([http://www.historylink.org/essays/output.cfm?file\\_id=4171](http://www.historylink.org/essays/output.cfm?file_id=4171))
- ・Preservation Seattle  
(<http://historicseattle.org/preservationseattle/pendinglandmarks/defaultSEPT06.htm>)
- ・The Online Encyclopedia of Washington State History  
([http://www.historylink.org/essays/output.cfm?file\\_id=4171](http://www.historylink.org/essays/output.cfm?file_id=4171))
- ・Project for Public Space ホームページ  
([http://www.pps.org/info/projects/parks\\_plazas\\_squares\\_projects/freeway\\_park](http://www.pps.org/info/projects/parks_plazas_squares_projects/freeway_park))
- ・City of Seattle Park Board Memo
- ・WRPA Today volume21 (September, 2006)
- ・“Management Improvement at freeway park garage”  
([http://www.ci.seattle.wa.us/audit/report\\_files/9506-FreewyPkGarage.pdf](http://www.ci.seattle.wa.us/audit/report_files/9506-FreewyPkGarage.pdf))

### <ヒアリング調査先>

氏名: Dewey Potter

所属: Public Information Officer for Seattle Parks, City of Seattle





02 ガスワークス・パーク Gas Works Park	(位置づけ)市管理公園	(所在地)アメリカ合衆国
	(管理者)シアトル市	／シアトル市

特徴	●環境汚染を乗り越え、湖畔の連続的な再生に寄与 ユニオン湖と連続する美しい景観の形成を目指し、工場跡地を公園として整備したが、環境汚染が発覚。ワシントン州、シアトル市、民間企業、そして市民が協働でクリーンアップや公園の活性化に取り組み、その結果、親水性が高く、市民に親しまれる公園として蘇り、湖畔の連続的な再生に寄与した。	
隣接施設等の種類と名称	湖沼	ユニオン湖
	工場跡	石炭ガス化工場 (Coal Gasification Plant)
立地環境	湖畔	

**隣接施設等との一体化・連携の概要**

◆ 1 管理運営段階における湖沼との連携：公園のさらなる利用促進に向けた方策を市民等と共に検討 **【空間確保レベル】**

ユニオン湖と連続する美しい景観の形成を目指し、工場跡地を公園として整備したが、後年になり環境汚染が発覚。ユニオン湖を管理するワシントン州、公園を管理するシアトル市に加え、以前工場を操業していたパジェット・サウンド・エナジー社が協働で、公園エリア及びユニオン湖のクリーンアップ事業を展開している。同時に市は、市民等と共に公園のさらなる活性化に向け検討を行っている。



ユニオン湖

ガスワークス・パーク



①ユニオン湖から見た  
ガスワークス・パーク

出典) シアトル市ホームページ  
ワシントン州ホームページ

連携レベル	骨格形成レベル	<b>空間確保レベル</b>	境界処理レベル	波及効果レベル
連携の段階	配置計画	整備	<b>管理運営</b>	

公園の概要			
所在地	アメリカ合衆国／シアトル市 (2101 N Northlake Way. Seattle, WA, US)		
管理主体	シアトル市 (公園レクリエーション部)		
開設	供用開始年月日	1975年	面積 19.1acre (約77,000m <sup>2</sup> )
<p>&lt;法的位置づけ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「シアトル市憲章第11部」(Article XI of Seattle City Charter)に基づき設置されたシアトル市公園レクリエーション部が、同憲章により公園管理を行う責務を付与。</li> <li>Seattle Municipal Code (SMC) 18.12 (Parks Code)により定義された公園として、行為規制等の規定に基づき管理。</li> </ul> <p>&lt;整備方針&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>同地では1900年初頭からシアトルガス会社(Seattle Gas Co.)によるガス製造が行われていたが、1956年に工場は操業を終了した。工場閉鎖後はパジェット・サウンド・エナジー社が設備倉庫として利用していたが、1962年、シアトル市はパジェット・サウンド・エナジー社より土地を購入した。</li> <li>シアトル市とシアトルガス会社が公園の整備を実施し、費用はシアトル市が拠出した。</li> <li>公園は建築家リチャード・ハーグが設計を行った。工場として使用されていた頃のプラントを再利用している。1975年に公園として一般へ開園した。</li> <li>過去にガス製造工場として使用されていた経緯から、多環芳香族炭化水素(PAHs)等による汚染が1984年になって発覚。2000年より、州、市、パジェット・サウンド・エナジー社が協働でクリーンアップ事業を展開。</li> </ul> <p>&lt;主な施設&gt;</p> <p>ピクニックエリア(バーベキュー場)、タワー</p> <p>&lt;利用状況&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ピクニックをする家族連れや、自転車に乗ったりたこ揚げしたりする人などでにぎわっている。米国独立記念日の7月4日には花火大会が開かれる。</li> <li>ガス工場の設置される以前は周辺住民の娯楽の場であったが、公園化に伴い、市全体から利用者が集まるようになった。</li> <li>コミュニティ・フェスティバル、独立記念日の祭典、コンサートなどに利用されている。</li> </ul>			

隣接施設等の概要		
湖沼	名称	ユニオン湖(Lake Union)
	管理者	ワシントン州
	面積	384,000acre(約1,554km <sup>2</sup> )
工場跡	名称	石炭ガス化工場(Coal Gasification Plant)
	管理者	シアトル市

公園・隣接施設等に関わる主な経緯	
1906年	ユニオン湖畔のエリア20acre(約81,000m <sup>2</sup> )の整備が行われ、石炭からガスを生成する工場を建設
1906年	ガス会社がプラントとして利用開始
1956年	採算性の問題から工場は閉鎖。その後しばらくはパジェット・サウンド・エナジー社(前Washington Natural Gas)が設備の保管場所として使用
1962年	シアトル市が公園エリアの土地を購入
1975年	一般に公園として開放
1984年	環境汚染に関する新たな法に基づき、EPA(Environmental Protection Agency)が公園エリアを調査した結果、新たな環境汚染が発覚
1990年	州は公園を有害危険地域としてリスト
1995年	州は、市、パジェット・サウンド・エナジー社との協力によるクリーンアップ事業の展開を検討
1997年	“Gas Works Park Environmental Cleanup Public Participation Plan”策定
1998年	“Gas Works Park Master Plan”、“The Adopted Neighborhood Plan”策定(1999年にかけて)
2000年	州、市、パジェット・サウンド・エナジー社によるクリーンアップ事業実施(2001年まで)
2005年	公園の北西エリアを新たに公園敷地として一般公開

公園・隣接施設等の位置・景観の状況

■位置図



1960年のGas Works Park



1965年のGas Works Park

出典) シアトル市ホームページ

## 連携の内容

### ◆ 1 管理運営段階における湖沼との連携：公園のさらなる利用促進に向けた方策を市民等と共に検討

#### <連携の背景・きっかけ>

- ・過去にガス製造工場として使用されていた経緯から、公園エリアでは以前から環境汚染が問題視されてきた。1980年代はじめに、環境汚染に関する新たな法が制定されると、1984年にガスワークス・パークにおいて新たな汚染が発覚した。
- ・既に公園として一般公開しているエリアの汚染が発覚したことを受け、ユニオン湖の管理者であるワシントン州、公園の管理者シアトル市、そして過去に同地を利用していたパジェット・サウンド・エナジー社は協働で環境汚染のクリーンアップ事業を展開することを決定した。

#### <連携の手法・工夫点>

- ・ワシントン州は、シアトル市、パジェット・サウンド・エナジー社が協働で実施するクリーンアップ事業において“Gas Works Park Environmental Cleanup Public Participation Plan”を策定し、事業への地域コミュニティの参画に取り組んだ。インタビューの実施や会合の開催、そして事業の意志決定をオープンとし、広く意見を取り入れた。

#### ■ “Gas Works Park Environmental Cleanup Public Participation Plan”

ガスワークス・パークの背景とコミュニティ、そして両者の関与についてまとめ、クリーンアップ事業においてコミュニティがどのように参画するかを記載している。コミュニティの参画の方法としては、事業主体からの情報発信、公衆からの質問、事業決定へ公衆意見の反映等が計画されている。

#### <連携の効果>

- ・シアトル市は汚染のクリーンアップ事業を進めるとともに、コミュニティとともに公園の改善に取り組んでいる。2005年には、それまで未公開であった公園の北西エリアを、公園の新たな敷地として一般へ公開した。公開にあたっては、コンサルタントやコミュニティとともにたびたびミーティングを開催し、デザインプラン等の検討を行った。

#### ■ 2005年に新たに一般へ公開された公園エリアの平面図



出典) シアトル市ホームページ

#### <参考文献>

- ・シアトル市ホームページ ([http://www.seattle.gov/parks/park\\_detail.asp?ID=293](http://www.seattle.gov/parks/park_detail.asp?ID=293))
- ・シアトル市ホームページ ([http://www.seattle.gov/parks/communitynotices/current/view/View\\_35\\_05-01-2003.htm](http://www.seattle.gov/parks/communitynotices/current/view/View_35_05-01-2003.htm))
- ・ワシントン州ホームページ (<http://www.ecy.wa.gov/programs/TCP/sites/gaswkspk/gaswks.htm>)
- ・“Gas Works Park Environmental Cleanup—Public Participation Plan”
- ・Preservation Seattle (<http://www.historicseattle.org/preservationseattle/preservationenv/defaultnovember.htm>)
- ・Conserving Land for People ([http://www.tpl.org/tier3\\_cdl.cfm?content\\_item\\_id=937&folder\\_id=729](http://www.tpl.org/tier3_cdl.cfm?content_item_id=937&folder_id=729))

#### <ヒアリング調査先>

氏名: Dewey Potter

所属: Public Information Officer for Seattle Parks, City of Seattle

<b>03 ローズ・ケネディ・グリーンウェイ</b> <b>(チャイナタウン・パークほか)</b> <b>Rose Kennedy Greenway</b>	(位置づけ) 州立公園	(所在地) アメリカ合衆国 ／ボストン市
	(管理者) ローズ・F・ケネディ・ グリーンウェイ管理協会	

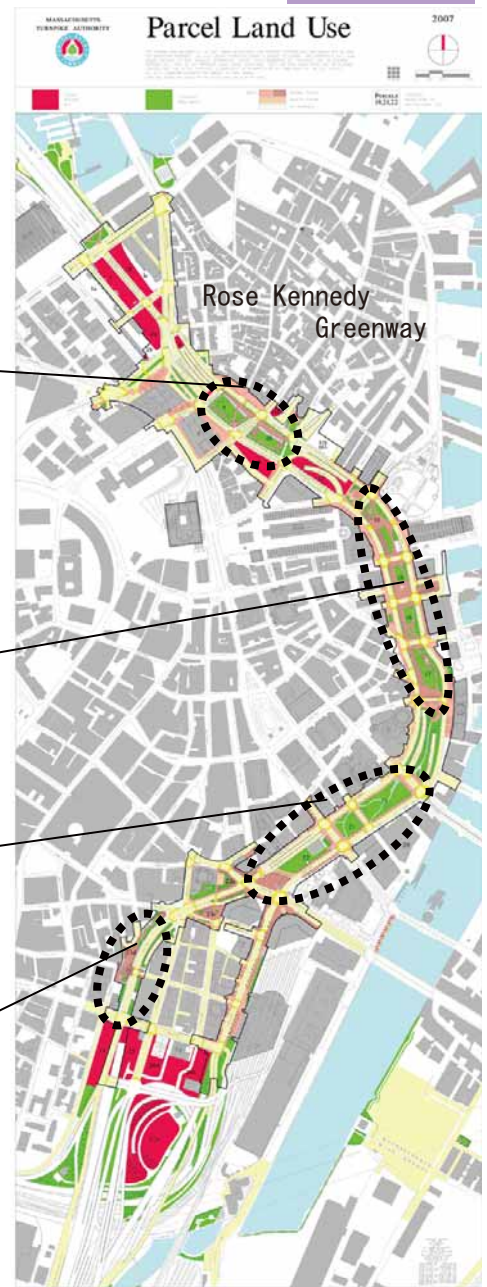
特 徴	●高速道路の地下化により創出される空間を活用し、市街地の緑のネットワークを形成 高速道路の地下化事業 Big Dig により形成される旧高架道路跡地を緑空間として整備 することで、中心市街地における緑のネットワークを形成。緑地には、それぞれの地 域のまちづくりにおいて、拠点となる公園を配置した。	
隣接施設等の 種類と名称	沿線建築物	ボストン市街地
立地環境	中心市街地	

**隣接施設等との一体化・連携の概要**

◆ 1 計画・整備段階における沿線建築物との連携：  
**新たに創出される都市空間の活用について、様々なステークホルダーと検討** 【骨格形成レベル】  
 新たに創出されるスペースの活用について検討するため、  
 市・州・市民で構成されるワーキンググループが組織され  
 た。実際の設計段階では大規模な市民参画が図られ、ス  
 ペースを活かした都市空間の再生計画が検討された。



Dewey Square Parks



出典) Massachusetts Turnpike Authority ホームページ

連携レベル	骨格形成レベル	空間確保レベル	境界処理レベル	波及効果レベル
連携の段階	配置計画	整備	管理運営	

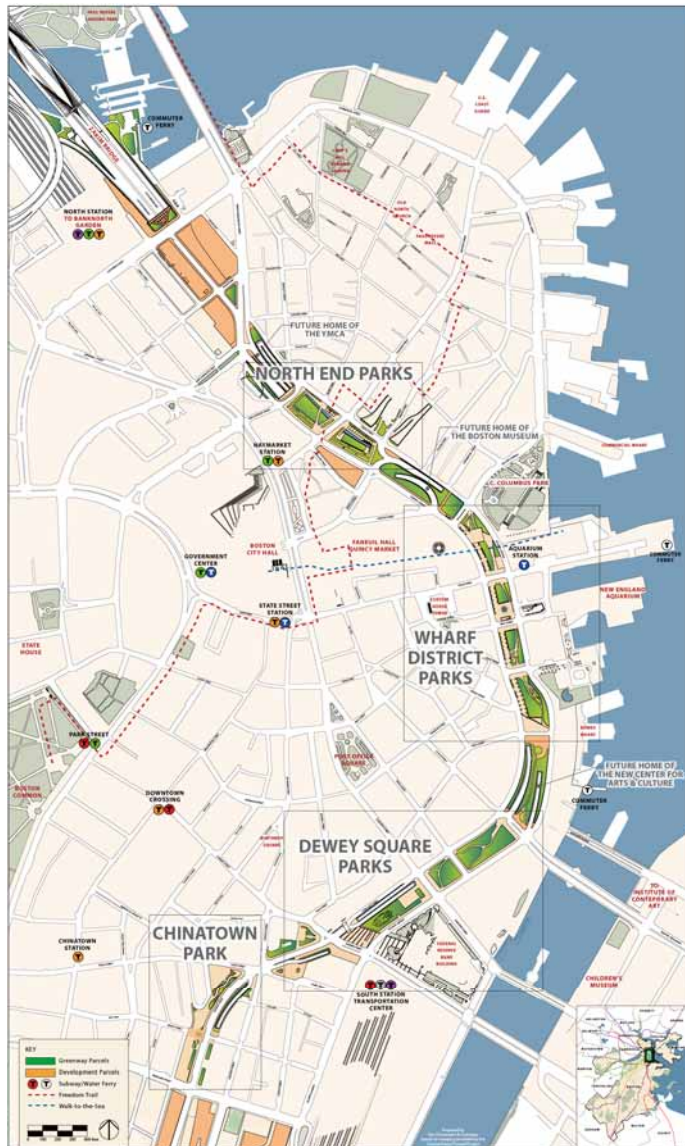
公園の概要			
所在地	アメリカ合衆国／ボストン市 (Boston, MA, US)		
管理主体	ローズ・フィッツジェラルド・ケネディ・グリーンウェイ管理協会		
開設	供用開始年月日	2004年	面積 15acre (約 60,700m <sup>2</sup> )
<p>&lt;法的位置づけ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「マサチューセッツ州憲法改正第 97 条」(Article 97 of the Amendments to the Constitution of Massachusetts)に基づき、マサチューセッツ州が公園として取得し、担保。</li> <li>・「マサチューセッツ州法 1996 年第 205 章 117 節」((Massachusetts Legislature, Section 117 of Chapter 205 of the Acts of 1996))により中央幹線地下道上部のオープンスペースを「ローズ・ケネディ・グリーンウェイ」として指定。</li> <li>・「マサチューセッツ州一般法第 180 章」に基づき関係機関の出資によりローズ・ケネディ・グリーンウェイの管理を目的として非営利組織「ローズ・フィッツジェラルド・ケネディ・グリーンウェイ管理協会」が設立され、「マサチューセッツ州法 2008 年第 306 章」(Chapter 306 of the Acts of 2008)により管理の権限を付与。</li> <li>・「マサチューセッツ有料道路公社、ボストン市、マサチューセッツ州、ローズ・フィッツジェラルド・ケネディ・グリーンウェイ管理協会によるローズ・ケネディ・グリーンウェイに関する合意事項覚書 (2004 年 7 月 12 日)」(Memorandum of Agreement regarding the Rose Kennedy Greenway by and between the Massachusetts Turnpike Authority, the City of Boston, the Commonwealth of Massachusetts, and the Rose Fitzgerald Kennedy Greenway Conservancy, Inc. (July 12, 2004))において、ローズ・フィッツジェラルド・ケネディ・グリーンウェイ管理協会と関係者間の責任分担を明確化。</li> </ul> <p>&lt;整備方針・内容&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高速道路を地下化する Big Dig 事業の推進主体は、マサチューセッツ州の公社であるマサチューセッツ有料道路公社 (The Massachusetts Turnpike Authority, MTA)。  <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;">           MTA は 1952 年にマサチューセッツ議会で設立。Big Dig を含む Metropolitan Highway System (MHS) と、Western Turnpike の運営を行っている。債権発行や所有土地の売却により Big Dig の資金を調達し、また、MTA は MHS の運営費用として最大 2 百万ドルを、州政府から受け取る契約をしている。         </div> </li> <li>・Big Dig 事業が多額の費用をかけて遂行された背景には、自動車社会の発展に伴う米国の都市問題に対する考え方の変化がある。1950 年代以降、豊かな生活空間を求め富裕層が郊外へ移転する一方で、ショッピング施設などの魅力が徒歩圏に集積する都市の希少価値と人気が高まった。ボストンもそのような都市のひとつであり、都心部の交通空間の有効な再構築により環境改善を図ることは、経済面で都市を活性化する有力な起爆剤として期待されている。</li> <li>・また、Big Dig 事業対象の高架高速道路の事故発生率や交通渋滞も深刻であった。事故発生率は全国平均の 4 倍にのぼり、交通渋滞は毎日 10 時間以上にわたった。抜本的な改良がなされなければ、2010 年までに 1 日最高 16 時間という極度な交通渋滞に直面すると予想された。</li> <li>・事業では巨額な工事費を賄うために、連邦政府 (全体事業費の約 59%を補助)、マサチューセッツ州、MTA, Massachusetts Port Authority (ローガン空港の運営主体)、交通インフラファンドなど、多様な手段により資金調達されている。</li> <li>・旧高架道路跡地は、緑空間ローズ・ケネディ・グリーンウェイ (以下グリーンウェイ) として整備される。グリーンウェイ内の公園の設置工事は MTA が実施。</li> <li>・グリーンウェイには 4 つの公園が設置されるが、各公園の整備方針は以下の通り。 <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> Chinatown Park …… ボストンのチャイナタウンや近隣の住人のために、アジア文化の喚起の意を込めて、門、橋、親水施設などを設置 (2007 年 9 月完成)。</li> <li><input type="checkbox"/> North End Parks …… Central Artery により分断されていた都市構造の再連結を意図したデザインとなっている。(2007 年 11 月完成)</li> <li><input type="checkbox"/> Wharf District Parks …… 北側はフェスティバルやパフォーマンスのために利用される集客スペース、南側は住居や事務所に利用される地域に隣接。(2007 年春完成)</li> <li><input type="checkbox"/> Dewey Square Parks …… 季節展示、様々なパフォーマンス、そしてパブリック・イベントの開催地としての利用を見込んでいる。</li> </ul> </li> </ul> <p>&lt;利用状況&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・整備段階でのプログラムとして“マザーズ・ウォーク”が実施されている。グリーンウェイ内の道に、自分にとって特別な人の名を刻印した舗装材を配置することができる (有料)。</li> <li>・イベントについては、管理協会のホームページ上でアイデアの応募を呼びかけている。</li> </ul>			
隣接施設等の概要			
沿線建築物	名称	ボストン市街地	
	主な建築物	商業業務ビル、ホテルなど	

## 公園・隣接施設等に関わる主な経緯

1959年	Central Artery (CA) の開通
1980年代	予備的代替案の作成とコンペの実施
1987年	連邦議会が事業計画を承認
1991年	「ボストン2000プラン」(最初の公式マスタープラン)の策定 土地利用・建築形態規制及びデザイン・ガイドラインを含むゾーニング法規の改正 建築と土木のジョイント開発の実現に向けた技術的分析の実施 マサチューセッツ環境保護局 (Massachusetts Environmental Protection Agency) が環境影響 評価書を承認、連邦道路局 (Federal Highway Administration) の決定により工事開始
1995年	地上の街路設計に関する合意事項が示された「街路コンセンサス・プラン」の策定 (～1997年)
1998年	「ボストン2000プラン」の更新
2001年	「ボストン・セントラル・アーテリヤ・コリドー・マスタープラン」(CA 跡地の75%を占める公園とオープンスペースの最終デザインのガイドライン)の策定
2003年	順次完成、公開
2004年	高架構造物の撤去
2005年	全ての道路が開通し、CA跡地の空間整備が進む
2008年	新しく整備される複合市街地の都市空間のあり方の検討 (サウス・ベイ・スタディ・エリア) 公園完成予定

## 公園・隣接施設等の位置・景観の状況

## ■位置図



出典) ローズ・ケネディ・グリーンウェイ管理協会ホームページ

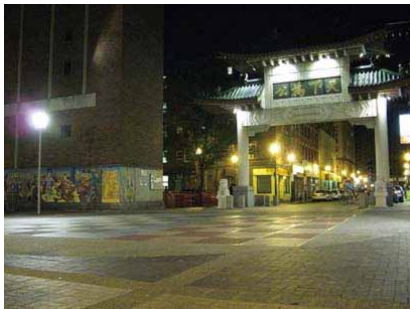
■ North End Parks



■ Wharf District Parks



■ Chinatown Park



出典) Massachusetts Turnpike Authority ホームページ



**連携の内容****◆1 計画・整備段階における沿線建築物との連携：  
新たに創出される都市空間の活用について、様々なステークホルダーと検討****<連携の背景・きっかけ>**

- ・州、ボストン再開発公社、ボストン建築家協会、プランニングや都市デザイン、建築、建設に関するコンサルタント、そして市民らはBig Digにより創出される新しい都市空間をどのように再生すべきか1980年代から検討。
- ・創出される都市空間の最初の計画として、市、ボストン建築家協会による予備的代替案が作成された。

**<連携の手法・工夫点>**

- ・市・州・市民で構成されるワーキンググループにより、「ボストン 2000 プラン」を作成。1991年にボストン市のマスタープランの一環として同プランを採択。マスタープランでは、旧高架道路跡地の75%をオープンスペースと規定した。
- ・「ボストン 2000 プラン」実現のため、ゾーニング法規改正（第49条「セントラル・アーテリー特別地区」を追加）。第49-5項には隣接地区との関係が検討されるべきことと定めた。
- ・市、州、市民による地上の街路設計の検討（街路コンセンサス・プランの策定）。
- ・「ボストン 2000 プラン」実現に向けたアクションプランを策定のため、市、州、市民で構成される「ボストン 2000 ワーキンググループ」を結成。「ボストン 2000 プラン」の改訂を行った。
- ・公園、オープンスペースの最終デザインのガイドラインとして「Boston Central Artery Corridor Master Plan」を策定。大規模な市民参加が行われ、100を超える会合が開かれた。MTAの指導の下、コンサルタントSMWMにより進められた。

**<連携の効果>**

- ・高架道路跡地のオープンスペースは緑空間ローズ・ケネディ・グリーンウェイとして整備。グリーンウェイにはNorth End Parks、Wharf District Parks、Dewey Square Parks、そしてChinatown Parkが設置される。ウォーターフロントやダウンタウンとの連続性、回遊性を取り戻し、これまで高速道路の通過により分断されていた都市空間の再生に貢献した。

**<参考文献>**

- ・MTA ホームページ (<http://www.masspike.com/bigdig/parks/greenway.html>)
- ・ローズ・フィッツジェラルド・ケネディ・グリーンウェイ管理協会ホームページ (<http://www.rosekennedygreenway.org/index.htm>)
- ・“高架構造物の撤去・再利用を通じた都市空間の再生” 村山顕人（東大国際都市再生研究センター）－財団法人土地総合研究所第116回講演会
- ・Green Space (<http://www.green-space.org.uk/improvement/thebigdig.php>)
- ・“ビッグディグ・プロジェクトの社会経済的影響” 田島夏与（国際交通安全学会誌 vol. 30、No. 4）



04 ガントリー・プラザ・ステート・パーク Gantry Plaza State Park	(位置づけ) 州立公園	(所在地) アメリカ合衆国
	(管理者) ニューヨーク州	／ニューヨーク市

特徴	●産業遺産の保存、活用によるウォーターフロント帯の活性化 イースト川 (East River) 沿岸の工業地帯の再開発事業 (Queens West Development) の一環として、戦前に使用されていた鉄骨跨線橋 (ガントリー) を保存・活用し、周辺の再開発と連動しているウォーターフロント公園。	
隣接施設等の種類と名称	再開発地区	クイーンズ・ウェスト開発 (Queens West Development)
	河川	イースト川 (East River)
立地環境	河川沿岸、再開発地区	

**隣接施設等との一体化・連携の概要**

◆1 計画・整備段階における再開発地区との連携：  
公園設置に関するコミュニケーションの場を設置し、多様なステークホルダーと共に公園のデザイン、配置計画を検討 **【空間確保レベル】**  
公園の計画・整備段階では、地域コミュニティからの反対を乗り越えるため、地域コミュニティと事業推進者の中で事業に関するコミュニケーションの場が多く持たれた。また、公園の設置にあたっては技術者、デザイナー、地元行政、そして地域住民など多様なステークホルダーが関与した。その結果、地域に親しまれる都市ウォーターフロントとしての開発に成功した。

ガントリー・プラザ・ステート・パーク

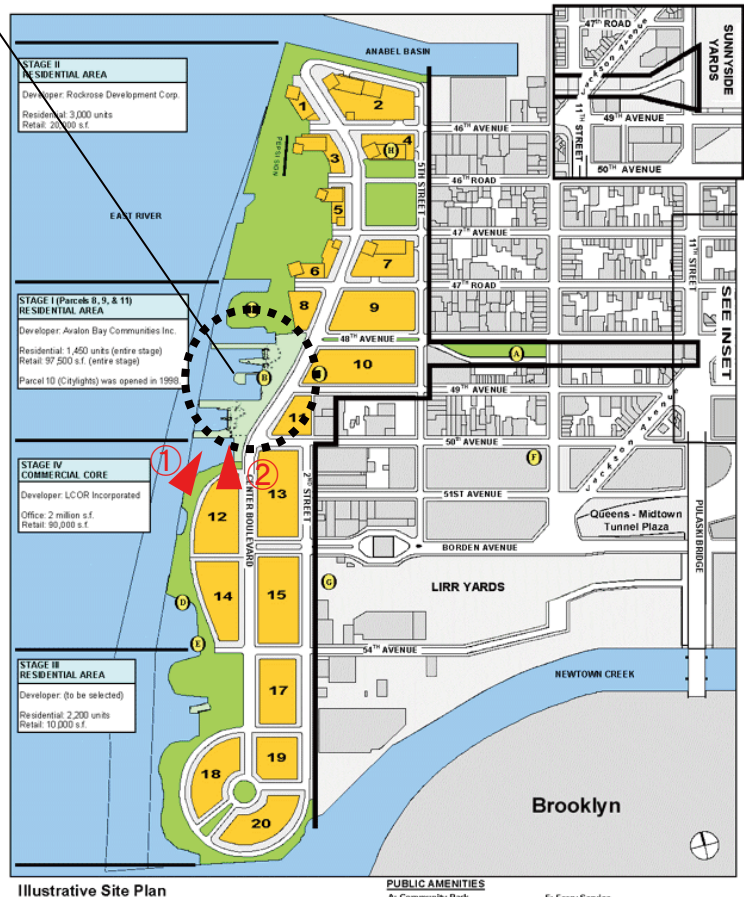
クイーンズ・ウェスト開発事業



①公園内の2基のガントリー



②公園内の敷地の様子



Illustrative Site Plan

**PUBLIC AMENITIES**

- A: Community Park
- B: Gantry Plaza State Park
- C: Peninsula Park
- D: Plaza / Public Wharf
- E: Ferry Service
- F: F Vernon-Jackson Subway Station
- G: LIRR Long Island City Station
- H: Future school
- I: Robert F. Wagner School (PS 78 Q)

633 Third Avenue, 36<sup>th</sup> Fl. New York, NY 10017 Tel (212) 803-3634 Fax (212) 803-3631 queenswest@empire.state.ny.us  
A Subsidiary of the Empire State Development Corporation Charles A. Gargano, Chairman

出典)  
 ニューヨーク州ホームページ  
 ニューヨーク・ニュージャージー港湾管理  
 委員会ホームページ

連携レベル	骨格形成レベル	<b>空間確保レベル</b>	境界処理レベル	波及効果レベル
連携の段階	<b>配置計画</b>	整備	<b>管理運営</b>	

公園の概要				
所在地	アメリカ合衆国／ニューヨーク市 (474 48th Avenue Long Island City, NY, US)			
管理主体	ニューヨーク州 (公園・レクリエーション及び歴史保存事務所)			
開設	供用開始年月日	1998 年	面積	2.5acre (約 10,000m <sup>2</sup> )
<p>&lt;法的位置づけ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ニューヨーク州公園・レクリエーション及び歴史保存法 (New York State Parks, Recreation and Historic Preservation Law) により所管部署であるニューヨーク州公園・レクリエーション及び歴史保存事務所の設置及び州立公園の設置を規定。</li> <li>・公園での行為規制は、州法 (Parts 370 - 378 of Chapter I of Subtitle I of Title 9 of the Official Compilation of Codes, Rules and Regulations of the State of New York (9 NYCRR 370-378)) に基づく。</li> </ul> <p>&lt;整備方針・内容&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ガントリー・プラザ・ステート・パークはクイーンズ・ウェスト事業の一環として整備されるウォーターフロント公園。事業の推進主体は、ニューヨーク州開発公社 (Empire State Development Corporation, ESDC) の子会社であるクイーンズ・ウェスト開発公社 (Queens West Development Corporation)。ニューヨーク市経済開発公社 (the New York City Economic Development Corporation)、ニューヨーク・ニュージャージー港湾管理委員会 (The Port Authority of New York &amp; New Jersey) などが後援している。</li> <li>・クイーンズ・ウェスト開発公社はクイーンズ・ウェスト事業を4つのフェーズに分割し、2012年までに16のアパートメントと4つのオフィスを建設する。</li> <li>・計画では2つの居住施設 (1,457のアパートメント) が建設され、さらに20,000平方フィート (1,900m<sup>2</sup>) の小売空間、児童学習センター、769の駐車スペースが設置される。</li> <li>・既に5つのアパートメントが完成し、また、ガントリー・プラザ・ステート・パークは1998年に開園している。</li> <li>・ガントリー・プラザ・ステート・パークは、戦前の近代工業化の時にマンハッタン島、ニュージャージー州とクイーンズ区鉱業地帯のハンタース・ポイントをフェリー鉄道で結び使用された鉄骨跨線橋を保存し、周辺の地域再開発と連動している。</li> <li>・独立記念日に行われた花火大会をきっかけに、近隣住民によって公園のメンテナンスなどを行う組織として“The Friends of Gantry State Park”が組織された。</li> </ul> <p>&lt;主な施設&gt;</p> <p>浅橋、釣った魚をさばく場所 (fish-cleaning station)</p> <p>&lt;利用状況&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎年7月4日の花火大会のビューポイントとして人気があり、多くの人に利用されている。2005年には20,000人の人が公園へ集まり、花火を楽しんだ。</li> <li>・夏には野外の音楽コンサート会場としても利用されている。</li> </ul>				

隣接施設等の概要		
再開発地区	名称	クイーンズ・ウェスト開発 (Queens West Development)
	実施者	クイーンズ・ウェスト開発公社 (Queens West Development Corporation)
	面積	74acre (約 300,000m <sup>2</sup> )
河川	名称	イースト川 (East River)
	管理者	The US Coast Guard
	全長	26km

公園・隣接施設等に関わる主な経緯
1993年 クイーンズ・ウェスト事業の計画検討開始
1997年 クイーンズ・ウェスト事業で最初の居住施設完成
1998年 ガントリー・プラザ・ステート・パーク開園 (2012年までにクイーンズ・ウェスト事業はすべて完了予定)

公園・隣接施設等の位置・景観の状況



出典) ニューヨーク・ニュージャージー港湾管理委員会ホームページ

■使用当時のガントリーの様子



出典) Queens West Development Corporation ホームページ

## 連携の内容

### ◆ 1 計画・整備段階における再開発地区との連携： 公園設置に関するコミュニケーションの場を設置し、多様なステークホルダーと共に公園のデザイン、配置計画を検討

#### <連携の背景・きっかけ>

- ・公園の設置に当たっては、事業により自らの住居の強制移転を恐れた地域コミュニティから反対意見が多く寄せられた。そのため、事業に伴い新たに転居してくる住民、そして事業以前より同地域に居住する住民の両者に親しまれるオープン・スペースとして公園を整備する必要があった。

#### <連携の手法・工夫点>

- ・計画・整備においては、以前は工業地帯であった場所を、都市ウォーターフロントとして再開発するため、技術者（海洋、構造、土木）、環境関連の法律家、測量士、デザイナー、コンサルタント（費用算定）など様々な人がチームに参加。
- ・公園と地域コミュニティのつながりを強化する方策の検討においては、近隣住民、出資者、地元行政、歴史家、生態学者等が計画・整備のチームをサポートした。また、地域コミュニティの住民と事業推進者の間でコミュニケーションの場が多く持たれた。

#### <連携の効果>

- ・計画段階では設置に対する地域住民からの反対意見が多かったが、1998年に開園後は“The Friends of Gantry State Plaza”を組織し、公園の維持管理に協力している。組織のメンバーには以前からの地域住民に加え、再開発に伴い転居してきた住人が含まれ、公園で開催されるイベントにボランティアとして参加するなど、協力している。

#### <参考文献>

- ・ニューヨーク州ホームページ (<http://www.nysparks.state.ny.us/parks/info.asp?parkID=86>)
- ・クイーンズ・ウェスト開発ホームページ (<http://www.queenswest.org/>)
- ・ニューヨーク・ニュージャージー港湾管理委員会ホームページ (<http://www.panynj.gov/doingbusinesswith/economic/html/queens.html#overview>)
- ・American Society of Landscape Architects ホームページ (<http://www.asla.org/meetings/awards/awds01/gantry.html>)

#### <ヒアリング調査先>

氏名: William Ledwitz

所属: Park Manager, Office of Parks, Recreation and Historic Preservation, New York State

05 サンアントニオ・リバーウォーク San Antonio Riverwalk	(位置づけ) 市管理公園	(所在地) アメリカ合衆国
	(管理者) サンアントニオ市	／サンアントニオ市

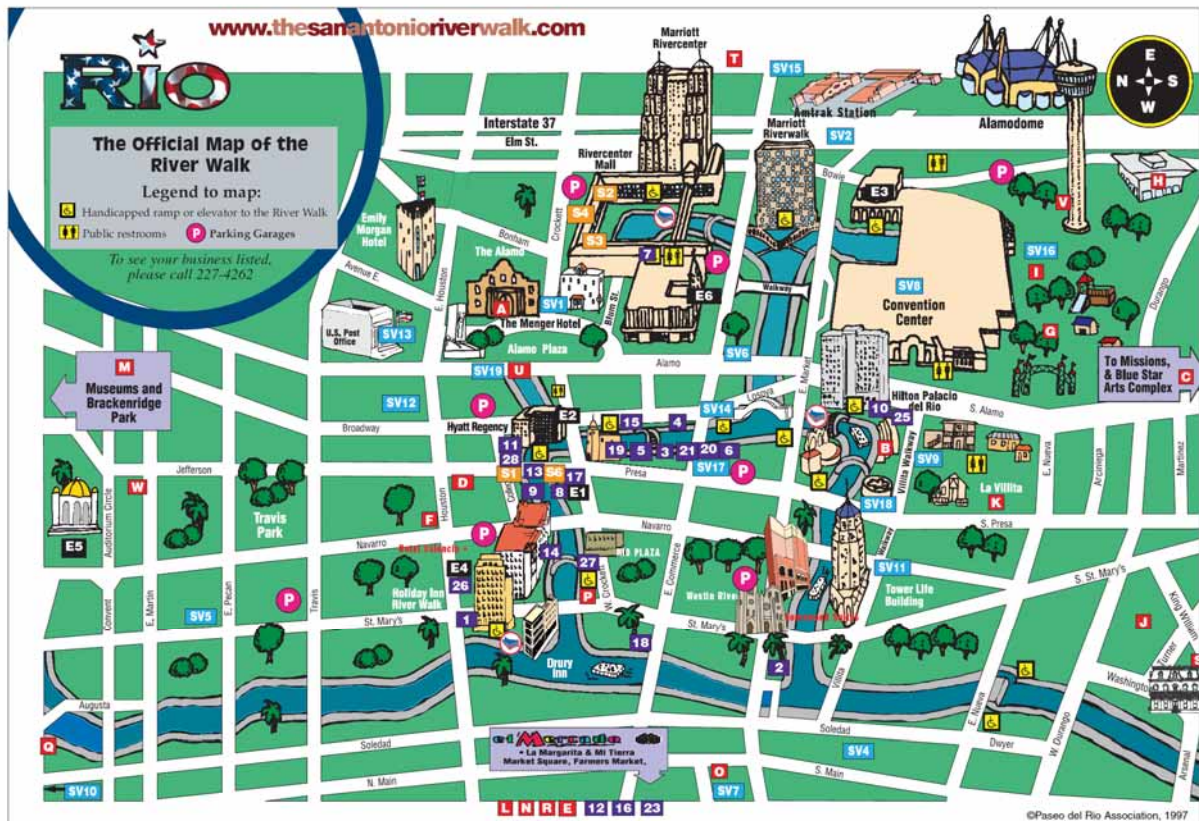
特 徴	●遊歩道の活用による街全体の活性化 サンアントニオ川の河川としての治水機能を維持しながら、沿岸を河川や水辺を活かした遊歩道として整備し活用することにより、サンアントニオの街全体の活性化に成功。	
隣接施設等の種類と名称	運河沿い	Paseo del Rio
	運河	サンアントニオ川 (San Antonio River)
立地環境	河川沿岸、商業地区 (カフェ、レストラン、ショップ、ホテル等)	

**隣接施設等との一体化・連携の概要**

◆ 1 管理運営段階における沿道商店街との連携：NPO 法人との協働による遊歩道の利活用  
【空間確保レベル】 【波及効果レベル】

リバーウォークの利活用においては、リバーウォークの所有者であるサンアントニオ市と NPO 法人パセオ・デル・リオが協働で、取り組み方針を検討している。その一方で、市はリバーウォークの維持管理等、協会はイベント開催等に取り組み、それぞれの役割を明確化している。

サンアントニオ・リバーウォーク マップ



出典) NPO 法人パセオ・デル・リオ協会ホームページ

連携レベル	骨格形成レベル	空間確保レベル	境界処理レベル	波及効果レベル
連携の段階	配置計画	整備	管理運営	

公園の概要			
所在地	アメリカ合衆国／サンアントニオ市 (San Antonio, TX, US)		
管理主体	サンアントニオ市 (ダウンタウン運営部)		
開設	供用開始年月日	1941 年	延長 約 4km
<p>&lt;法的位置づけ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・サンアントニオ市憲章第 I 条第 3 節第 7 段落及び第 13 段落で、市が公園等の設立、維持する権限を規定。</li> <li>・都市計画委員会の設置を規定した第 IV 条において、同委員会が策定し市議会が承認するマスタープランに基づき、同委員会の承認がなければ公園等の建設は認められない旨を規定。</li> <li>・サンアントニオ市条例第 22 章で、「公園及びレクリエーション」についての一般的な管理規定とは別途、特定の公園 (Riverwalk については第 IX 条) に係る規定。</li> </ul> <p>&lt;整備方針&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1921 年の洪水災害を機に、市は河川の洪水対策を検討。一度は技術者たちによる提案 (貯水池の設置、川の拡幅・直線化、地下チャンネルの設置、コンクリートによる整備) を許可したが、City Federation of Women's Clubs、The San Antonio Conservation Society などが反対。市は提案の実行をとりやめた。</li> <li>・The San Antonio Conservation Society は街をより美しく、活気のあるものにしたいと願い、技術者との間での議論の結果、建築家の Hugman による提案を採用。リバーウォークとして整備することとなった。</li> <li>・市は、リバーウォークの水を引き込んだ約 4 ha (約 40,000m<sup>2</sup>) の敷地にマリオットホテル (1988 年開業、約 1000 室)、商業施設、レストラン、劇場を備えた複合施設のリバーセンター建設に成功した。</li> </ul> <p>&lt;利用状況&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・遊歩道にはカフェやレストラン、ショップが並び、川のクルーズ、アウトドア・シアター、そしてアントニオ・フェスタ・パレード、ライトニング、アート&amp;クラフトショー等のイベントが開催されている。</li> <li>・NPO 法人パセオ・デル・リオ協会は現在、遊歩道を活用し、季節に応じた以下のイベントを開催している。 <ul style="list-style-type: none"> <li>□Michelob ULTRA River Walk Mud Festival : 毎年、1 月にサンアントニオ川のメンテナンスを行うため、川水の排水後 1 週間に渡ってリバーウォーク全体で開催。Mud Queen と King コンテストやパレードが行われる。</li> <li>□BUD LIGHT Mardi Gras River Parade : 飾り付けられた遊覧船が川に並び、仮装やライブが行われ、お酒がふるまわれる。</li> <li>□Guinness Dyeing of the River Green&amp;St.Patrick's Day Parade : 聖パトリックの日を祝って川が緑色に染められ、パレードなどを開催。</li> <li>□Ford Children's Festival : 子供向けのお祭り。ゲームやライブなど実施。</li> <li>□Ford Mariachi Festival : 地元の中学生と高校生が参加している Mariachi Band による演奏会。</li> <li>□FORD Canoe Challenge : 地元の 90 チーム以上が参加するカヌーレース</li> <li>□DOS EQUIS Pachanga Del Rio : 協会に参加している団体からの料理がふるまわれる。</li> <li>□FORD Holiday River Parade&amp;Lighting Ceremony : 感謝祭に合わせてリバーウォーク全体が 1 月 1 日までライトアップされる。クリスマスに向けたパレード等も行われる。</li> <li>□Arts&amp;Crafts Show : 手作りのアクセサリーや芸術品等の展示販売会。</li> </ul> </li> </ul>			

隣接施設等の概要		
運河沿い	名称	Paseo del Rio
	管理者	NPO 法人パセオ・デル・リオ (開催イベント等の管理)
運河	名称	サンアントニオ川 (San Antonio River)
	管理者	The San Antonio River Authority (SARA)

公園・隣接施設等に関わる主な経緯	
1921 年	洪水災害が発生し、50 人の死者が出る惨事となった
1937 年	テキサス州法により The San Antonio River Authority 設立
1939 年	遊歩道としての整備事業がスタート
1941 年	整備事業完了
1962 年	リバーウォーク諮問委員会を設立するとともにリバーウォーク地区設定
1963 年	全米建築家協会サンアントニオ支部 “パセル・デル・リオ” 発表
1964 年	パセオ・デル・リオ協会設立
1988 年	巨大なダウンタウンモールが建設され、リバーウォークを拡張接続



公園・隣接施設等の位置・景観の状況



サンアントニオ市管理の公園分布図  
(サンアントニオ市中心部拡大図)

緑色が市管理の公園、中心に線状に連続しているのが  
リバーウォーク (Riverwalk)

出典) サンアントニオ市公園及びレクリエーション部  
作成図 (2006年6月7日作成)



出典) NPO 法人パセオ・デル・リオ協会ホームページ

## 連携の内容

### ◆ 1 管理運営段階における沿道商店街との連携：NPO 法人との協働による遊歩道の利活用

#### <連携の背景・きっかけ>

- ・第二次大戦後、リバーウォークへの関心は薄れ、川の整備、美化活動も行われなくなると、浮浪者が増え、街はゴーストタウンと化した。市は、1963 年、全米建築家協会サンアントニオ支部提案によるリバーウォーク再生のマスタープラン「パセオ・デル・リオ（川の遊歩道）」を採択し、街の再生に乗り出した。
- ・サンアントニオ市民が、「パセオ・デル・リオ」のための 50 万ドルの債券発行を支持。市はリバーウォークに関する条例を採択し、NPO 法人パセオ・デル・リオ協会が発足した。

#### <連携の手法・工夫点>

- ・NPO 法人パセオ・デル・リオ協会は以下の方針でリバーウォークの推進、支援を実行している。
  - ビジターや居住者にリバーウォークの魅力を伝える特別イベントの開催
  - リバーウォークの特徴や雰囲気の保全、環境面の改善促進
  - 公衆や団体との協働による計画及び実施方針の作成
  - 事業者、居住者、市民、そして行政とともに、リバーウォークに係わる問題解決のための会議を開催
- ・リバーウォークを所有する市は、植栽やセキュリティ管理などの維持管理に専念する一方、遊歩道を活用したイベントの開催等は NPO 法パセオ・デル・リオ協会が管理し、リバーウォークにおける相互の役割分担を明確にしている。



イルミネーションで飾られたリバーウォーク  
出典) サンアントニオ市ホームページ

#### <連携の効果>

- ・協会のさまざまな再生プランにより、街は徐々に活気を取り戻し始めた。1968 年の万国博覧会の開催を契機にリバーウォーク周辺には数多くのホテルも建設された。現在、リバーウォーク沿いには多くのショップやレストラン、ホテルが軒を連ねている。

#### <参考文献>

- ・NPO 法人パセオ・デル・リオ協会ホームページ (<http://www.thesanantonioriverwalk.com/index.asp>)
- ・The Handbook of Texas Online (<http://www.tshaonline.org/handbook/online/articles/PP/hpp1.html>)
- ・サンアントニオ市ホームページ (<http://www.sanantonio.gov/dtops/Riverwalkdo.asp>)
- ・Project for Public Space ホームページ  
([http://www.pps.org/great\\_public\\_spaces/one?public\\_place\\_id=22](http://www.pps.org/great_public_spaces/one?public_place_id=22))
- ・San Antonio River Authority ホームページ (<http://www.sara-tx.org/>)

#### <ヒアリング調査先>

氏名: Greg Gallaspy  
所属: Executive Director, Paseo del Rio Association

06 ベルシー公園 Parc de Bercy	(位置づけ)都市緑地ゾーン	(所在地)フランス/パリ市
	(管理者)パリ市	

特 徴	●セーヌ川との連続性の確保による地域一帯の活性化 河川・鉄道・道路で分断されているパリ東部セーヌ川沿い一帯の開発戦略の一環として設置され、セーヌ川との連続性（親水性）や、人道橋の設置による対岸エリアへのアクセスが重視されたデザインとなっている。	
隣接施設等の種類と名称	河川	セーヌ川
	スポーツセンター	Palais omnisports de Paris-Bercy
	図書館（対岸）	Bibliothèque nationale de France F.Mitterrand
立地環境	河川沿岸	

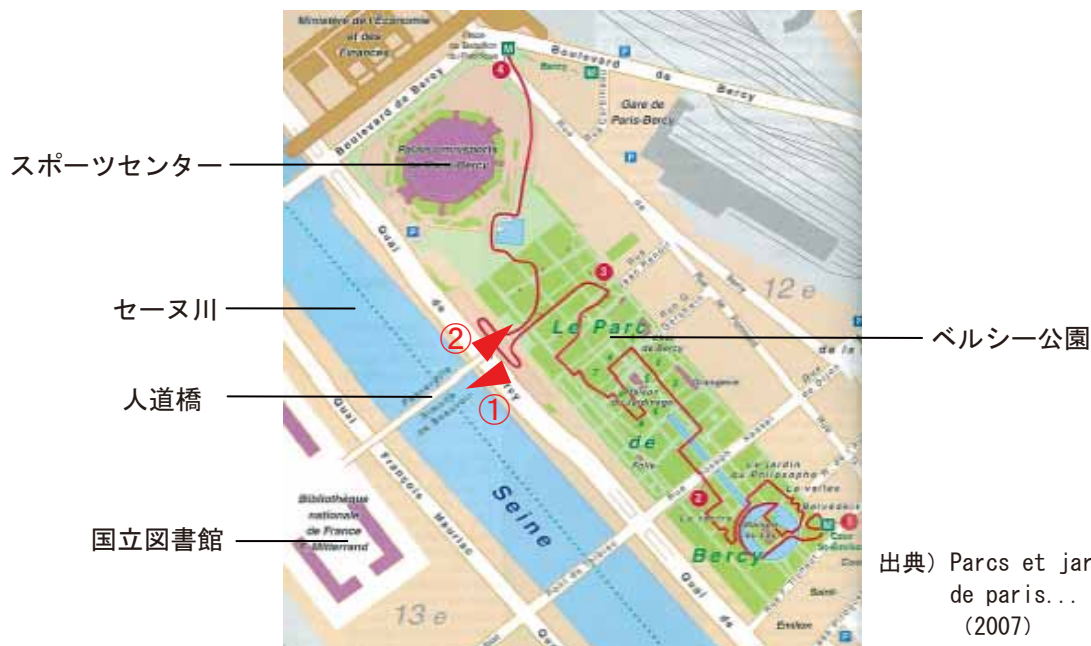
### 隣接施設等との一体化・連携の概要

#### ◆1 計画・整備段階における河川との連携：

セーヌ川及びその対岸との連続性を確保する公園設計により、河川沿岸の一帯を活性化

【空間確保レベル】

フランスの新市街地開発手法の下でベルシー地区の再開発が行われ、その一環として河川・鉄道・道路により分断されていたエリアをベルシー公園として整備。セーヌ川の対岸への人道橋が設置されるなど、周辺施設や河川との連続性に配慮したデザインとなっており、地域の一体性の創出に貢献した。



出典) Parcs et jardins de paris... a pied (2007)



①対岸の国立図書館と人道橋でつながり、徒歩でアクセスが可能となっている



②公園内の広場（左にスポーツセンター）

連携レベル	骨格形成レベル	空間確保レベル	境界処理レベル	波及効果レベル
連携の段階	配置計画	整備	管理運営	

公園の概要				
所在地	フランス／パリ市 (rue de Bercy 75012, Paris, FR)			
管理主体	パリ市			
開設	供用開始年月日	1995 年	面積	14ha
<p>&lt;法的位置づけ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ベルシー地区は、Zone d'aménagement Concerte (ZAC、協議整備区域) に指定されている。これは他の地域よりも優先的に優良な市街地を形成すべき地域を指定する、フランスで制定された新市街地開発手法である。ベルシー地区は ZAC のもとで再開発が行われ、ベルシー公園はその事業の一環として整備された。</li> <li>・公園の設置主体はパリ市都市計画局 (the Atelier Parisien d'Urbanisme、APUR) であり、他 SEMAEST (パリ市・パリ東部経済混合会社、51%をパリ市が所有) や Jean-pierre Buffi (建築家) などが関与。</li> <li>・2001 年の都市連帯・再生法 (SRU) により導入された新たな都市計画制度に基づいて改定されたパリ市の「ローカル都市計画」PLU (Plan Local d'Urbanisme、2007 年 12 月 17 日改正) において、「都市緑地ゾーン」として位置づけ。</li> </ul> <p>&lt;整備方針&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ベルシー地区は、元々はワイン倉庫が並ぶ地区であったが、1970 年代末にはワイン倉庫は使用されなくなった。ワイン倉庫の閉鎖後からベルシー地区の再計画の話があったが、パリ西部と比べて文化的にも劣り、活発な議論とはならなかった。</li> <li>・1994 年、パリ市により公園の一部がまず一般公開され、残りの部分は 1995 年に公開。既に建設されていたスポーツセンターの延長として作られ、1995 年に約 2 ha の公園が完成したことにより、総面積は約 14ha となった。</li> <li>・園内施設のガーデニングハウス (House of gardening) では、ガーデニングに関するあらゆる情報を提供している。また、園内にはいくつかの彫刻作品が展示されている。</li> <li>・公園はセヌ川の船着場との連続性や対岸へのアクセスも考慮されたデザインとなっている。また、スポーツセンターは半地下式で芝生の屋上は公園の緑と連続している。</li> </ul> <p>&lt;主な施設&gt;</p> <p>ガーデニングの家 (House of gardening) 、回転木馬</p> <p>&lt;利用状況&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・公園内は散歩だけではなく、利用者がガーデニングを楽しめるようになっている。</li> <li>・利用者に親しまれており、丸 1 日園内で過ごす利用者の姿も見られる。ベンチでくつろぐ利用者も多い。また、犬を連れて訪れる利用者も見られる。</li> <li>・パリ市内の小学生向けに野菜畑がある。</li> <li>・金属のスロープとジャンプ台が公園内に設けられており、スケートボード及びローラーブレードを用いた利用が可能となっている。</li> <li>・園内の道はバリアフリーに配慮されており、車いすの利用者の姿も見られる。</li> </ul>				

隣接施設等の概要		
河川	名称	セヌ川
	管理者	Port Autonome de Paris
スポーツセンター	名称	Palais omnisports de Paris-Bercy
	管理者	パリ市
図書館	名称	Bibliothèque nationale de France F. Mitterrand
	管理者	フランス政府 文化・コミュニケーション省

公園・隣接施設等に関わる主な経緯	
12 世紀	ルイ 14 世によりベルシーに初めてワイン倉庫が置かれる
1960 年代	パリ市都市計画局 (the Atelier Parisien d'Urbanisme、APUR) により開発計画が持ち上がる
1979 年	ほぼすべてのワイン倉庫が閉鎖
1984 年	スポーツセンター建設
1994 年	ワイン倉庫のエリアがベルシー公園として完成
1995 年	第 2 期の公園が完成

## 公園・隣接施設等の位置・景観の状況

## ■平面図



出典) Parcs et jardins de paris... a pied (2007)



①人道橋により、セーヌ川沿いを通過する道路を越え、対岸へ徒歩でアクセスできる



②、③ 公園内では水生植物の植栽が見られ、親水性の豊かな空間が広がる



④ガーデニングハウスではガーデニングに関する様々な情報を発信



⑤公園内には彫刻が展示されている

## 連携の内容

### ◆ 1 計画・整備段階における河川との連携： セーヌ川及びその対岸との連続性を確保する公園設計により、河川沿岸の一角を活性化

#### <連携の背景・きっかけ>

- ・ベルシー公園の整備以前、公園エリアは道路や鉄道、セーヌ川の存在により地域や市街地から遮断された状況にあった。

#### <連携の手法・工夫点>

- ・公園は 1983 年に建設されたスポーツセンターの延長として作られ、隣接する施設との連続性を考慮したデザインの下、整備された。
- ・人道橋の設置により、国立図書館があるセーヌ川の対岸へのアクセスに配慮されており、また、隣接するセーヌ川の船着き場への連続性にも配慮されている。

#### <連携の効果>

- ・パリ東部セーヌ川沿いのベルシー地区の再開発事業の下、道路や鉄道、セーヌ川により分断されていたエリアを公園として整備し、周辺施設や地域との連続性を創出した。

#### <参考文献>

- ・パリ市ホームページ ([http://www.vl.paris.fr/EN/Visiting/gardens/parc\\_bercy.asp](http://www.vl.paris.fr/EN/Visiting/gardens/parc_bercy.asp))
- ・Architectural Review 1995 - Bercy brief: urban regeneration project in Paris, France ([http://findarticles.com/p/articles/mi\\_m3575/is\\_n1180\\_v197/ai\\_17277352/pg\\_1](http://findarticles.com/p/articles/mi_m3575/is_n1180_v197/ai_17277352/pg_1))
- ・Landscape Architecture Study Tour ([http://courses.umass.edu/latour/2007/shafner/Joe\\_Web\\_Page.html](http://courses.umass.edu/latour/2007/shafner/Joe_Web_Page.html))
- ・Parcs et jardins de paris... a pied (Mairie de Paris ffrandonnee, 2007)

07 アンドレ・シトロエン公園 Andre Citroen	(位置づけ)都市緑地ゾーン	(所在地)フランス/パリ市
	(管理者)パリ市	

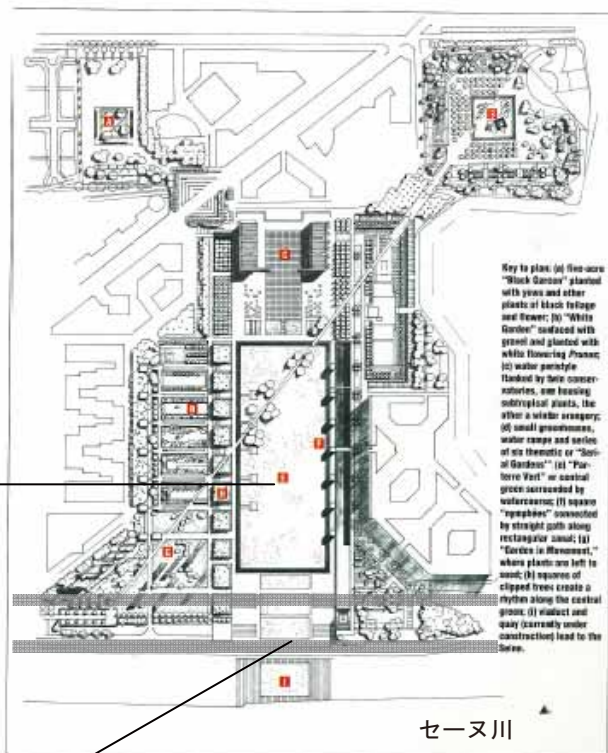
特徴	●セーヌ川との連続性の確保により、河川沿岸一帯を活性化 セーヌ川など、公園に隣接する施設や地域のアクセス性に配慮した一体的な整備により、河川沿岸地域の活性化に貢献	
隣接施設等の種類と名称	河川	セーヌ川
立地環境	河川沿岸	

**隣接施設等との一体化・連携の概要**

- ◆ 1 計画・整備段階における河川との連携：鉄道の高架化や道路の地下化によるセーヌ川との連続性の確保 **【空間確保レベル】**  
公園整備にあたり、隣接する鉄道は高架化され、また、道路は地下化されることで、公園と周辺地域（セーヌ川等）との連続性が維持された。



上空からの公園全景  
出典) パリ市ホームページ



アンドレ・シトロエン公園

道路 (地下)

鉄道 (高架)

出典) Landscape Architecture vol. 83, NO. 4 (1993)

セーヌ川



公園設置に伴い、セーヌ川沿いにあった鉄道敷は高架化、道路は地下化された。公園から水辺へ徒歩で近づくことができる。

連携レベル	骨格形成レベル	<b>空間確保レベル</b>	境界処理レベル	波及効果レベル
連携の段階	<b>配置計画</b>	<b>整備</b>	管理運営	

公園の概要			
所在地	フランス／パリ市 (Quai André-Citroën 75015, Paris, FR)		
管理主体	パリ市		
開設	供用開始年月日	1992 年	面積 13.8ha
<p>&lt;法的位置づけ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1977 年、SDAU 都市整備基本計画 (Schéma directeur d'aménagement et d'urbanisme、1969 年制定) に基づき、地区一帯は Zone d'aménagement Concerte (ZAC、協議整備区域) に定められた。</li> <li>・2001 年の都市連帯・再生法 (SRU) により導入された新たな都市計画制度に基づいて改定されたパリ市の「ローカル都市計画」PLU (Plan Local d'Urbanisme、2007 年 12 月 17 日改正) において、「都市緑地ゾーン」として位置づけ。</li> </ul> <p>&lt;整備方針&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1970 年までの約 1 世紀に渡りシトロエンの工場として使用され、工業荒地であった。パリ市にありながらも、住民たちには市外にいるような印象を与えてきた。</li> <li>・SDAU の中で、2,500 世帯の住宅、事務所、病院、公園などを含む新たな地区として整備されることが決定。</li> <li>・その中で、「14ha におよぶ公園の作成はパリのこれからの発展とのバランスをとりながら行われ、且つ、レ・アルを中心としたラ・ビレット、ベルシー 2 大公園とともに、3 番目の頂点として大きな緑地の三角形を首都につくる」とし、アンドレ・シトロエンは将来のパリの大公園としての機能が強調された。</li> <li>・1985 年にパリ市主催による国際コンペが開催され、表面的なデザインがよく似ていた 2 組が受賞者として発表された。</li> <li>・1 年に渡り受賞者が協議を重ねた結果、公園の計画が決定し、1988 年着工スタート。</li> <li>・公園設計のコンセプトは“都市から田園への移行”であり、4 つのテーマ (artifice、architecture、movement、nature) を設定している。</li> </ul> <p>&lt;主な施設&gt;</p> <p>大温室、小温室、運河、遊具</p> <p>&lt;利用状況&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・週末だけでなく、平日も多くの人に利用されている。</li> <li>・大温室前広場やパルテールは、芝生の上でくつろぐ人々にぎわっており、ボール等で遊ぶ子供の姿も多く見られる。</li> <li>・北側のエリアには遊具が設置されており、小さな子供連れの利用客で賑わっている。</li> </ul>			

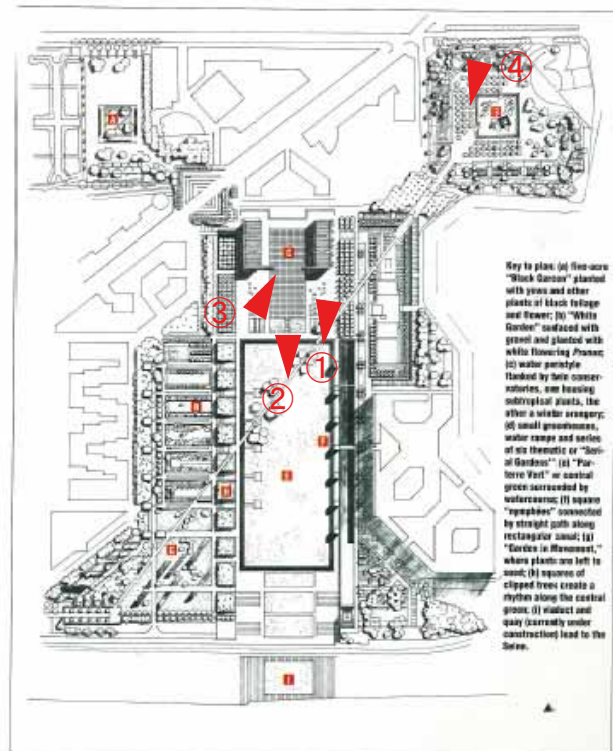
隣接施設等の概要		
河川	名称	セーヌ川
	管理者	Port Autonome de Paris

公園・隣接施設等に関わる主な経緯	
18 世紀以前	サン・ジェルマン・デ・プレ教会が土地を所有
1860 年	首都改造によりパリ市に併合、シトロエンの工場が建設
1967 年	Zone d'aménagement Concerte (ZAC、協議整備区域) 制定
1969 年	SDAU 都市整備基本計画 (Schéma directeur d'aménagement et d'urbanisme) 制定
1970 年	シトロエン工場がパリ郊外へ移転
1977 年	SDAU 都市整備基本計画により、公園エリアが Zone d'aménagement Concerte (ZAC) に定められる
1985 年	パリ市主催の国際コンペの開催。造園家と建築家が一組になってコンセプトを組み立てる。合計 63 案が提出され、最終的に 2 組の受賞者を決定。
1986 年	1 年に渡り、受賞した両チームの間で公園デザインに関する協議を実施
1988 年	公園着工
1992 年	アンドレ・シトロエン一般公開



## 公園・隣接施設等の位置・景観の状況

## ■ 平面図



出典) Landscape Architecture vol. 83, NO. 4 (1993)



①、② 公園中央には芝生の大空間が広がり、壮大な景観を生み出している



③大温室



④公園南の広場“黒の庭”の様子

## 連携の内容

### ◆ 1 計画・整備段階における河川との連携：鉄道の高架化や道路の地下化によるセーヌ川との連続性の確保

#### <連携の背景・きっかけ>

- ・SDAU 都市整備基本計画 (Schéma directeur d'aménagement et d'urbanisme) により、地区一帯は Zone d'aménagement Concerté (ZAC、協議整備区域) に定められ、2,500 世帯の住宅、事務所、病院、公園などを含む新たな地区として整備されることが決定された。

#### <連携の手法・工夫点>

- ・公園の整備にあたり、隣接する鉄道は高架化され、また、道路は地下化されることで、公園と周辺地域（セーヌ川等）との連続性が維持された。

#### <連携の効果>

- ・多くの利用者に親しまれる公園として成功し、地域の活性化に貢献している。

#### <参考文献>

- ・パリ市ホームページ ([http://www.v1.paris.fr/en/Visiting/gardens/parc\\_andre\\_citroen.asp](http://www.v1.paris.fr/en/Visiting/gardens/parc_andre_citroen.asp))
- ・Japan Landscape No. 31 (発行：株式会社プロセスアーキテクチャ、1994年)
- ・スペースデザイン SD 第 406 号 (発行：鹿島出版会、1998年)
- ・Beyond The BigDig MIT Case Study ([http://www.boston.com/beyond\\_bigdig/cases/citroen.htm](http://www.boston.com/beyond_bigdig/cases/citroen.htm))
- ・Michael Riha "Parc Andre Citroen South of Paris, France Landscape Architects: Giles Clement & Alan Provost" - Landscape Architecture, University of Maryland

08 バスティーユ公園 Promenade Plantee	(位置づけ) 都市緑地ゾーン (一部) 歩行者道	(所在地) フランス/パリ市
	(管理者) パリ市	

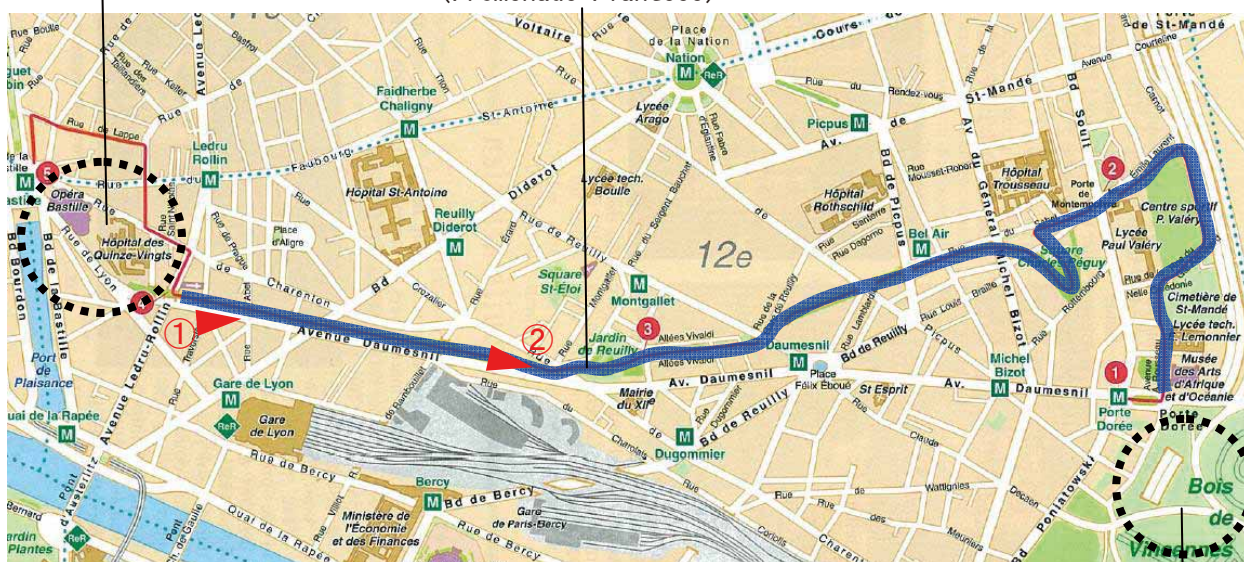
特徴	● 高架鉄道跡地の活用による周辺地域一帯の活性化 高架鉄道跡上部を緑道として再生するとともに、高架の下部はショップやギャラリーとして整備し、高架鉄道跡地の周辺一帯を活性化。	
隣接施設等の種類と名称	高架鉄道廃線敷	バスティーユ・ヴァンセンヌ鉄道
	沿線建築物	バスティーユ市街
立地環境	市街地	

隣接施設等との一体化・連携の概要

◆ 1 計画・整備段階における沿線建築物との連携：民間組織との共同事業による高架鉄道跡地の整備  
【骨格形成レベル】 【空間確保レベル】

高架鉄道跡の上部の緑化、下部のショップ等への整備はパリ市、パリ市・パリ東部経済混合会社 (SEMAEST)、Art and Craft Association の共同事業として実施され、高架鉄道跡地周辺一帯の活性化につながった。

バスティーユ公園  
(Promenade Plantee)



出典) Parcs et jardins de paris... a pied (2007)

ヴァンセンヌの森



① 高架鉄道跡と下部はショップとして活用され、上部の緑道とともに、一帯の賑わいを形成している



② 高架鉄道上部は緑道の美しい景観が続く

連携レベル	骨格形成レベル	空間確保レベル	境界処理レベル	波及効果レベル
連携の段階	配置計画	整備	管理運営	

公園の概要				
所在地	フランス／パリ市 (12th arrondissement, Paris, FR)			
管理主体	パリ市			
開設	供用開始年月日	1998 年	面積	16acre (約 65,000m <sup>2</sup> )
<p>&lt;法的位置づけ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「一般都市域ゾーン」内の歩行者道(Liaison piétonniere。都市計画法 L. 123-1 § 6° に基づく)を核として、「都市緑地ゾーン」公園や、「一般都市域ゾーン」内の保護緑地(EVP: Espace vert protégé。都市計画法 L. 123-1 § 7° に基づく)を連結。</li> <li>・パリ市「ローカル都市計画」PLU (Plan Local d'Urbanisme、2007 年 12 月 17 日改正)において、「都市緑地ゾーン」に位置づけ。</li> </ul> <p>&lt;整備方針&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・バスティーユ・ヴァンセンヌの森を結ぶバスティーユ高架鉄道 (the Bastille-Vincennes) は 110 年に渡り利用されていたが、1969 年に廃線となった。跡地はフランス国鉄 (the French National Railroad Company) からパリ市へ売却されたが、1989 年まで跡地は特に活用されなかった。1987 年に市の委員会はバスティーユ高架鉄道跡地の再開発を決定した。</li> <li>・高架の下部はショップやギャラリー、上部は 4.5km に及ぶ緑道 Promenade Plantee として整備された。</li> <li>・高架上部の緑道 Promenade Plantee の整備事業においては、費用のうち 50%をパリ市、25%を民間開発者、25%をフランス国鉄 (the French National Railroad Company) が拠出した。事業の実施主体はパリ市の Parks, Gardens and Open Spaces 局。</li> <li>・地上部の緑道に自転車専用道路が併設され、歩行者だけではなく自転車の利用も活用できる。(高架鉄道跡上部の緑道には自転車専用道路は設置されていない)。また、高架橋のアーチの部分は工房として整備され、芸術家や職人の作業の様子を外の通りから見る事ができる。</li> <li>・鉄道跡地は大きく 3 つの区画に分けることができる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>□Viaduc des Arts …高架の下に店舗やギャラリーがある。小さな庭園にバラなどが植えられている。</li> <li>□Parc de Reuilly …緑のスロープがあり、旧住民と新住民を結びつけている。</li> <li>□Mail (Mall) …自転車専用道路や駅につながり、木々が植えられている。</li> </ul> </li> <li>・この地域は高低差があるため、約 1.5km に渡り高架橋が設置されている。高架橋終点部の地区は再開発特定区域として住宅が整備されたため、緑道は高架からグラウンドレベルまで延伸され約 4 km に渡り整備された。緑道の幅は約 10m。</li> <li>・西洋の伝統的な手法をベースに、モダンなモニュメントの設置、竹林や色鮮やかな植栽計画が施されている。また、実のなる樹木や花の咲く植物が巧みに配され、冬でもジョギングなどを楽しむパリっ子の姿が多く見られる。</li> <li>・高架橋終点部には広大な芝生広場が広がり、緑道を巨大な木橋でつないでいる。高層住宅が並ぶ再開発特定区域では、芝生と街路樹のピスタが効いている。再開発特定区域を抜けるとトンネル越しに緑の森が続く谷の緑道に変わる。</li> </ul> <p>&lt;主な施設&gt;</p> <p>店舗 (Viaduc des Arts)</p> <p>&lt;利用状況&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・鉄道跡上部は歩行者が多く見られ、賑わいを見せている。緑道にはベンチが設置されており、休憩や読書をしてくつろぐ利用者の姿が見られる。</li> <li>・鉄道上部の緑道は自転車による通行も可能だが、自転車の利用者は少なく、歩行者がほとんどである。</li> <li>・エリアは安全で明るく、頻繁にパトロールも行われており、よく維持されている。</li> <li>・芸術や文化的な豊かさをテーマとしたスペシャルイベントが開催されている。</li> </ul>				

隣接施設等の概要		
高架鉄道廃線敷	名称	バスティーユ・ヴァンセンヌ鉄道
	管理者	パリ市
	全長	4.5km
沿線建築物	名称	バスティーユ市街
	主な建築物	商店、ホテルなど

公園・隣接施設等に関わる主な経緯

- 1969年 バスティーユ高架鉄道 (the Bastille-Vincennes) の運行廃止
- 1987年 パリ市議会は鉄道跡地を緑地として再開発することを決定
- 1988年 鉄道跡地の再開発事業開始
- 1998年 緑道 Promenade Plantée を一般へ公開      2000年 鉄道跡地の再開発事業完了

公園・隣接施設等の位置・景観の状況



①、②高架鉄道跡の上部は緑あふれる歩行空間として、美しい景観が続く



出典) Parcs et jardins de paris... a pied (2007)



③高架鉄道跡下部はショップとして活用され、上部の緑道とともに周辺一帯の活性化に寄与している



④緑道下の広場 (Parc de Reuilly)



⑤緑道では橋も自転車による通行が可能



⑥高架鉄道上部から続く地上部の緑道も、美しく整備されている

## 連携の内容

### ◆ 1 計画・整備段階における沿線建築物との連携：民間組織との共同事業による高架鉄道跡地の整備

#### <連携の背景・きっかけ>

- ・高架鉄道跡地のある 12th arrondissement 周辺にはまとまりある緑のスペースが少なく、パリ中心部から歩行者や自転車の利用者呼び寄せするような緑のスペースが必要であった。

#### <連携の手法・工夫点>

- ・高架鉄道跡の上部の緑化、下部のショップ等への整備はパリ市、パリ市・パリ東部経済混合会社 (SEMAEST)、Art and Craft Association の共同事業として実施された。

#### <連携の効果>

- ・整備された緑道は、周辺の住民をつなぐ媒体として貢献している。また、これまで鉄道を境に分断されてきた地域をつなぐ役割を果たしている。

#### <参考文献>

- ・ The New York Times (<http://www.nytimes.com/2005/08/21/nyregion/thecity/21plan.html>)
- ・ Beyond The Big Dig ([http://boston.com/beyond\\_bigdig/cases/paris/index.shtml](http://boston.com/beyond_bigdig/cases/paris/index.shtml))
- ・ Promenade Plantee (<http://www.promenade-plantee.org/>)
- ・ Landscape Architecture Study Tour (<http://courses.umass.edu/latour/2007/best/index.html>)
- ・ Friends of the High Line ([http://www.thehighline.org/images/gallery\\_promenade.html](http://www.thehighline.org/images/gallery_promenade.html))
- ・ Parcs et jardins de paris... a pied (Mairie de Paris ffrandonnee, 2007)

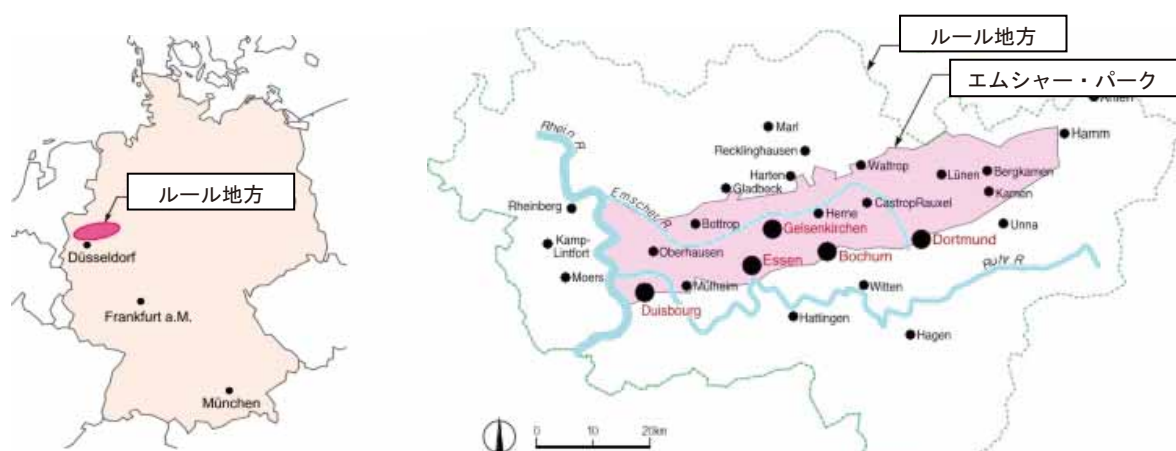
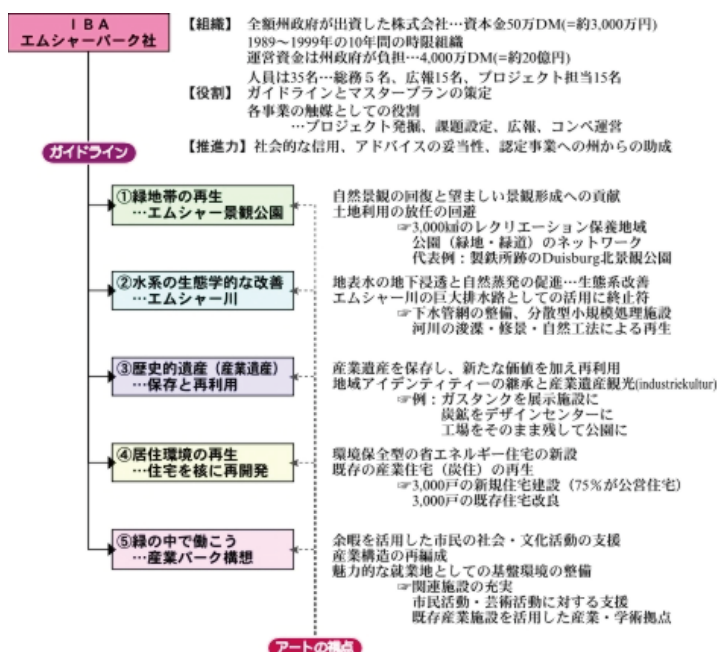
09 エムシャー・パーク (デュイスブルグ北景観公園ほか) Emscher Park	(位置づけ) 景観公園	(所在地) ドイツ連邦/ ノルトライン・ヴェスト ファーレン州
	(管理者) ルール地域連合 (RVR)	

特徴	●工業地域の大規模再開発による広域緑地・公園の整備 総面積 800km <sup>2</sup> に及ぶエムシャー川流域の大規模な再開発に取り組むにあたり、the International Building Exhibition (IBA) 手法を導入し、外部からのアイデアを積極的に取り込んだ。	
隣接施設等の種類と名称	産業遺産	メイデリッヒ鉄精錬所 (デュイスブルグ北景観公園)、他
	河川	エムシャー川、ルール川
立地環境	工業地帯	

隣接施設等との一体化・連携の概要

◆1 計画・整備段階における産業遺産との連携：  
IBA 手法の導入により、産業遺産等を活用し、各地域において拠点となる緑地・公園を整備  
【骨格形成レベル】

- エムシャー・パークは、IBA 手法を活用し、荒廃傾向にあったルール工業地帯を、広域緑地・公園として整備する大規模な再開発事業である。
- 1989 年から 1999 年にかけて、州出資の IBA 公社により事業は推進された。エムシャー・パークは7つのゾーンに区分され、それぞれに拠点となる公園 (デュイスブルグ北景観公園等) を整備した。
- エムシャー・パーク事業で実施されたプロジェクトは、そのほとんどが自治体や民間が実施主体であった。エムシャー・パーク事業そのものの推進主体である IBA 公社は、各自治体等から申請されたプロジェクトが適正かどうかの判断を行った。



出典) 春日井道彦『人と街を大切にするドイツのまちづくり』(学芸出版社、1999年)

連携レベル	骨格形成レベル	空間確保レベル	境界処理レベル	波及効果レベル
連携の段階	配置計画	整備	管理運営	

公園の概要			
所在地	ドイツ連邦／ノルトライン・ヴェストファーレン州 (North Rhine-Westphalia, GER)		
管理主体	プロジェクト・ルール公社		
開設	供用開始年月日	1989年 (事業開始)	面積 800km <sup>2</sup>
<p>&lt;法的位置づけ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・エッセンほか11の都市と4つの郡に係るマスタープランの作成と実施等を目的として、ルール地域連合(RVR)を設立するノルトライン・ヴェストファーレン州法「ルール地域連合に関する法律」(Gesetz ueber den Regionalverband Ruhr)によって、エムシャー景観公園(Emscher Landschaftspark)の維持、発展についてRVRの責務であると規定(§4(1)-2)。</li> </ul> <p>&lt;整備方針・内容&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・IBAはドイツにおいて100年ほど前から行われてきた「展覧会や展示会のような活動」で、新しいアイデアを外部から積極的に集め、プロセスを全て公開するのが特徴。固定的な展覧会・展示会が開催されるわけではなく、建築などの分野で先端的なテーマを取り入れ、それを恒久的に展示するドイツの伝統的な手法である。この手法により、建築や環境に対する市民意識の向上、ひいては地域の活性化に寄与することができると考えられている。</li> <li>・ノルトライン・ヴェストファーレン州政府がIBAエムシャー・パーク公社を設置し、再開発に着手した。公社は州立の私的企業で、1988年に設置された。民間投資を喚起する上では私的企業体の方がなじみやすいとの理由から、州政府の省内には置かれず、私的企業として独立。</li> <li>・エムシャー・パークの事業はノルトライン・ヴェストファーレン州の開発公社(IBAエムシャー・パーク公社)、ルール地域連合(RVR、2004年の州法改正によりルール自治体連合(KVR)からルール地域連合(RVR)へ改称)、そして各市により具体的な開発整備が進行。</li> <li>・エムシャー・パークは汚染地域の大規模再開発事業である。ルール地域で進められ、工業地域の中心部を核に、エムシャー川流域で東西を結ぶ広域緑地・公園である。対象地域は17市、2町からなり東西75km、南北10-11km、800km<sup>2</sup>に及ぶ。</li> <li>・エムシャー・パークの再開発整備においては、大きく5つのカテゴリーがある。 <ul style="list-style-type: none"> <li>①産業遺産的な地区(例：デュイスブルク北景観公園、等)</li> <li>②自然の植生遷移で樹林化を進める地区(例：フロントロップ旧操車場跡地、等)</li> <li>③ボタ山(例：展望場としての整備、等)</li> <li>④住宅地区、新規住宅地地区開発、工場の建物が残った公園など</li> <li>⑤工業地域となる以前の農林業的文化景観の公園的活用(メヒテンブルク農業公園、等)</li> </ul> </li> <li>・IBA公社の期限(10年)が迫った1998年、州政府は結局特定の省が監督しないプロジェクト・ルール公社を新たに設立(IBAエムシャー・パーク公社は都市・住宅・交通省が監督)。</li> <li>・IBAの事業は1989年から1999年で一応終了しているが、州、広域行政、各郡市町の関連事業として継続される。</li> <li>・エムシャー・パーク事業の将来にわたる「持続的な地域発展」を目指し、プロジェクト・ルール公社は2010年マスタープランを作成し、生態的・河川工学的な改善計画が2014年まで進められる。</li> </ul> <p>&lt;主な施設&gt;</p> <p>デュイスブルク北景観公園、オーバーハウゼン州庭園博会場、リップスホルスト生態樹林園、クベレンブッシュ公園、連邦庭園博会場ノルトシュテルン公園、メヒテンベルク公園、ヘルテン南公園、ブラデンホルスト公園、ヘンリッヘンブルク公園、リューネン州庭園博会場、ゼゼク公園、サイクリング道</p> <p>&lt;利用状況&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・古い工場建築物、製造所などが「産業文化遺産」のルートに沿って互いに結ばれ、観光レクリエーション利用を供している。</li> </ul>			

隣接施設等の概要		
産業遺産	名称	メイデリッヒ鉄精錬所(デュイスブルク北景観公園)、他
	管理者	デュイスブルク市、他(産業遺産が所在する各市)
河川	名称	ルール川(ライン川の支流)
	管理者	ノルトライン・ヴェストファーレン州
	名称	エムシャー川
	管理者	ノルトライン・ヴェストファーレン州



**公園・隣接施設等に関わる主な経緯**

1847年	ルール炭坑地域に鉄道敷設
1904年	運河、港の整備が進む（1914年まで）
1966年	ルール開発計画書の中で地域計画レベルによる緑地帯の整備（7つの緑地帯整備）を決定
1989年	IBA 公社設立（1999年まで事業を実施し、解散）
2004年	州法改正（KVR から RVR へ変更）
2005年	“Masterplan Emscher Landscapepark”策定

**公園・隣接施設等の位置・景観の状況**

エムシャー・パークにおいて、ゾーンの拠点として整備された公園の例

■ デウイスブルグ北景観公園



出典) ルール開発協議会 (RVR) ホームページ

## 連携の内容

### ◆ 1 計画・整備段階における産業遺産との連携： IBA手法の導入により、産業遺産等を活用し、各地域において拠点となる緑地・公園を整備

#### <連携の背景・きっかけ>

- ・ルール地方を流れるエムシャー川流域は、石炭鉱業、鉄工業、化学工業などが最も密集した鉱工業地帯を形成していた。1970年代を境に産業構造が転換し、地域を支えてきた重工業も衰退。90年代に入ってからドイツ国内で一、二位を争う高い失業率を抱えるに至り、また、汚染された自然環境や破壊された景観が負の遺産として残された。そこで、産業構造の転換を契機に地域の活性化を主眼に、疲弊した自然環境の再生及び地域文化の振興を目指すプロジェクトとして、The International Building Exhibition (IBA) エムシャー・パーク構想が立ち上がった。エムシャー・パークは以下のコンセプトに基づき進められている。
  - ・雇用の場でいかに人間らしい職場環境を確保するか
  - ・有限の存在としての自然環境に配慮した環境共生型地域開発をいかにすすめるか
  - ・地域に存在する伝統、文化を次代にいかに継承するか

#### <連携の手法・工夫点>

- ・IBAはトップダウン型の開発政策ではなく、個々のサイトを再開発のターゲットとする“Integrated Regional Development (IRD)”による開発戦略を推進する。事業を実施するにあたり、コンペティション方式などでアイデアを国内外から広く募集し、そのプロセスは展覧会などを通して一般市民にも知らせる民主的な手法である。
- ・州によるIBA公社の設立以前に、地域16自治体の人々を集め、1年間にわたりルールのエムシャー川流域にはどのような問題があるか等を議論し、その結果まとめられた冊子がIBAエムシャーパーク・プロジェクトの基本コンセプトとなった。
- ・1988年、NRW州政府の都市開発・住宅・交通省により「ルール地域北部のエコロジーとエコノミーの更新に向けての国際建築展」を実施することを決定し、そのコンセプトを「メモランダム」として示した。その中で、国際建築展の活動の柱となる7つのガイドライン・プロジェクトが示された。
- ・プロジェクトの実現化に向けた推進役としてIBAエムシャー・パーク公社が設立された。この団体の任務は、プログラムに盛り込むべき具体的課題の設定、IBAプロジェクトの掘り起こしと認定、デザイン等の選定を行っていく。加えて、アイデアの立案等を通して本プロジェクトの実施主体となる自治体、他の公共団体、地元財界及びプロジェクトを実際に受け入れる市民をつなげていく仲介役となる。
- ・IBA公社が実施したプロジェクトは、そのほとんどが主体は自治体や民間であり、公社は申請されたプロジェクトが適正かどうかの判断を行った。

#### <連携の効果>

- ・エムシャー・パークは7つのゾーンに区分され、それぞれのゾーンで拠点的な公園等が整備された。例えば、デュイスブルグ北景観公園は、200ha (2km<sup>2</sup>) に及ぶ広大な工場跡地を、広大なフリースペースの創出による住環境と生活環境の向上を目的に開発された。精錬所の高炉を記念物として保存し、展望台として活用し、コンクリート壁はクライミング練習壁、地下水槽をダイビング練習槽として活用している。
- ・プロジェクト・ルール公社とパートナーの市が協働で取り組み、マスタープラン“Masterplan Emscher Landscape Park 2010”の骨子を作成した。

#### <参考文献>

- ・勝野武彦「IBAエムシャーパークと地域計画」(ランドスケープ研究 64 (1)、2000年)
- ・日本大学生物資源科学センター「自然と人間が無事に生きつづけられる地域環境づくり国際シンポジウム」配付資料 (2005年)
- ・岡本拓哉・田中靖記「ライン・ルール大都市圏における都市再生」(空間・社会・地理思想 10号、2006年)
- ・春日井道彦『人と街を大切に作るドイツのまちづくり』(学芸出版社、1999年)
- ・ルール地域連合 (RVR) ホームページ (<http://www.rvr-online.de/index.php>)
- ・財団法人日本地域開発センター ニュースレター No. 43 (2006年)
- ・日独フォーラム資料 変革の時代と地域開発 WRAP 委員会発行 1994年
- ・「ドイツ・ルール地域北部の広域環境再生実験 IBAエムシャーパーク」雑誌「BIO CITY」第6号 1995年

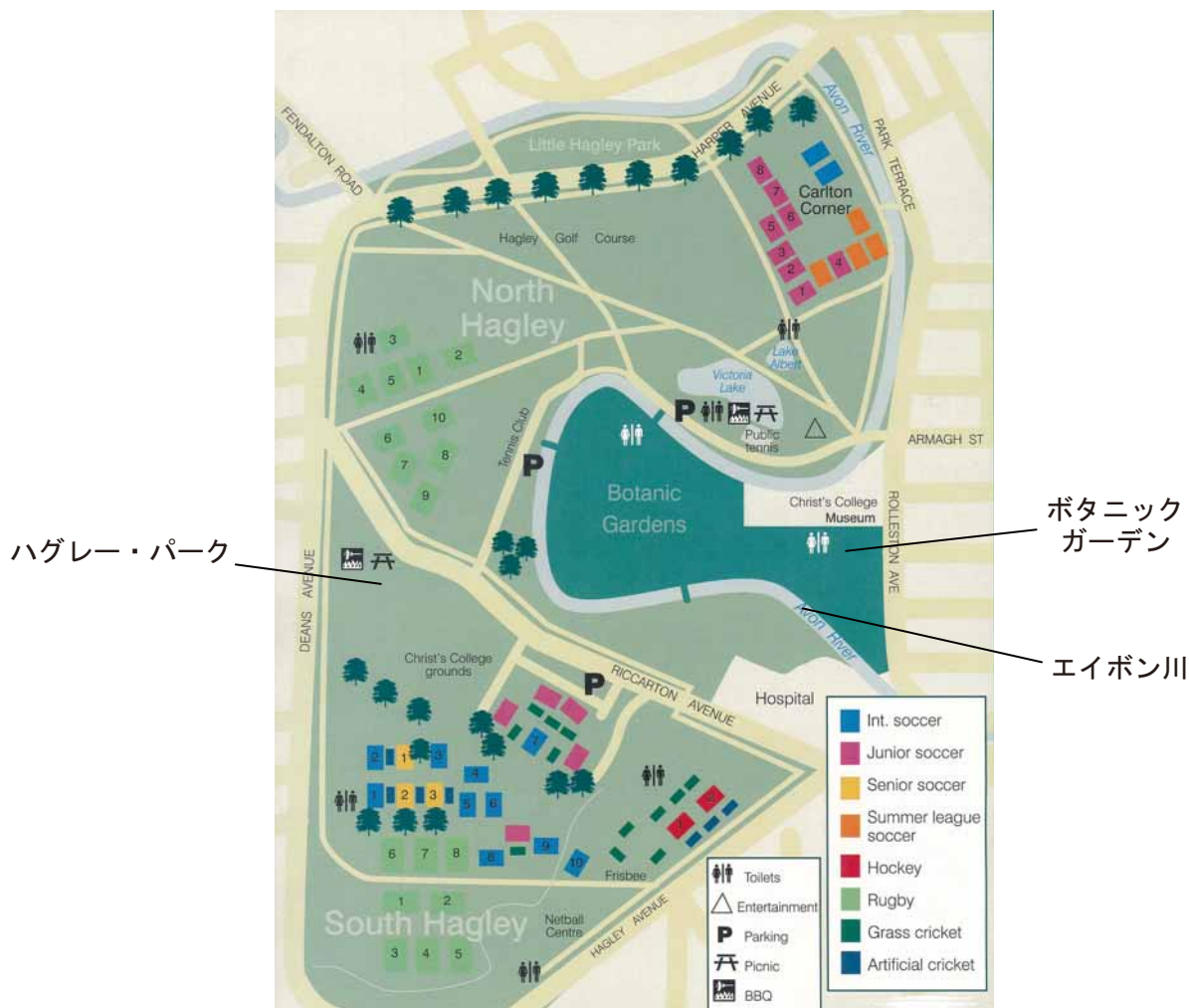
10 ハグレー・パーク Hagley Park	(位置づけ) レクリエーション保留地 オープンスペース2	(所在地) ニュージーランド ／クライストチャーチ市
	(管理者) クライストチャーチ市	

特 徴	●公園と河川の一体的景観及び一体的利用 ハグレー・パークに関するマスタープラン”Hagley Park/Botanic Gardens Master Plan” や”Hagley Park Management Plan” によって、河川の機能を保ちつつ、水辺の景観が保全され、公園と河川の一体的な利用が可能となっている。	
隣接施設等の種類と名称	河川	エイボン川 (Avon River)
立地環境	市街地	

隣接施設等との一体化・連携の概要

◆ 1 管理運営段階における河川との連携：河川の利活用を含めた公園の維持管理に関する計画の策定 **【境界処理レベル】**

公園の管理運営にあたっては、マスタープラン”Hagley Park/Botanic Gardens Master Plan” や”Hagley Park Management Plan”を基本に維持管理を実施するとともに、水面を活用したレクリエーション（カヌー等）を公園利用者に提供している。これらにより、ハグレー・パークとエイボン川の一体的利用を可能にするとともに、一体的景観を形成している。



出典) クライストチャーチ市ホームページ

連携レベル	骨格形成レベル	空間確保レベル	<b>境界処理レベル</b>	波及効果レベル
連携の段階	配置計画	整備	<b>管理運営</b>	

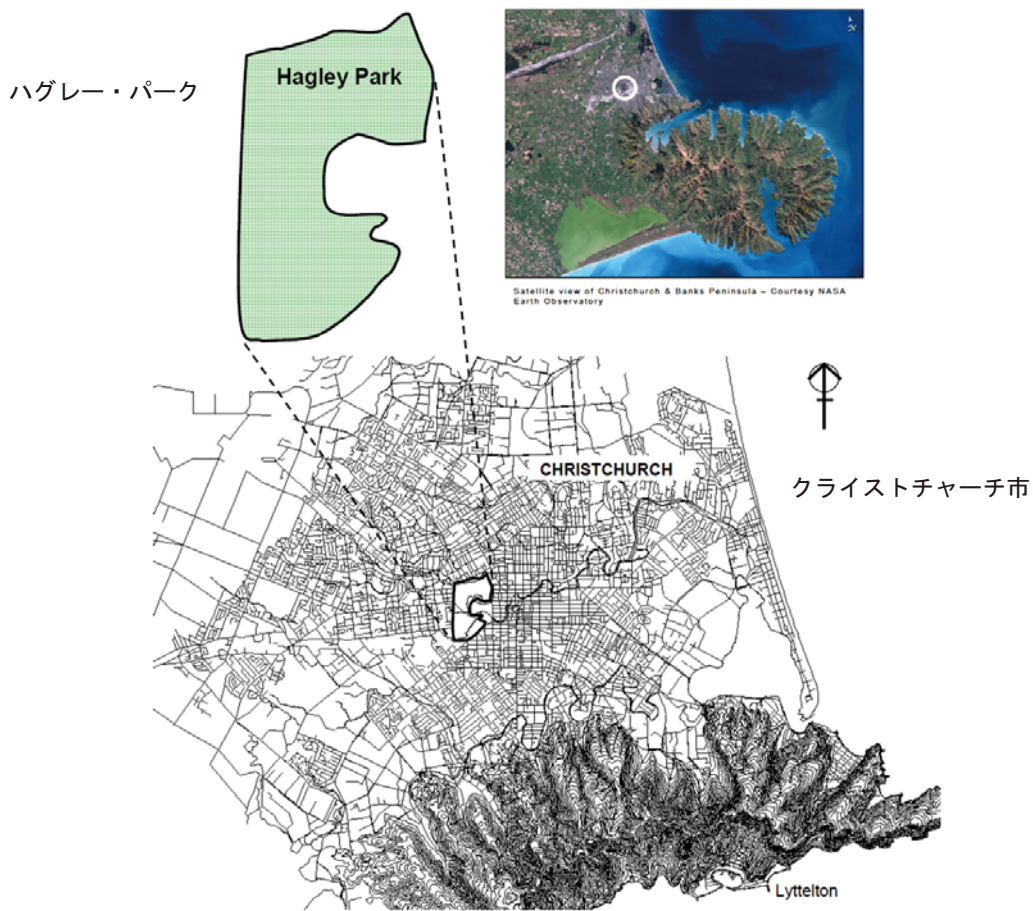
公園の概要			
所在地	ニュージーランド／クライストチャーチ市 (Rolleston Ave, Christchurch, NZ)		
管理主体	クライストチャーチ市		
開設	供用開始年月日	1850 年代	面積 495acre (約 2km <sup>2</sup> )
<p>＜法的位置づけ＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・リザーブ法(Reserves Act 1977)により「レクリエーション保留地」に指定。また、同法第 41 条の要件に基づき管理計画を策定。</li> <li>・資源管理法(Resource Management Act 1991)で策定が義務づけられているクライストチャーチ市の地域計画(Christchurch City Plan)により「オープンスペース 2」(レクリエーションの為の大規模なパブリックオープンスペースから構成され、広く郊外や地区的な機能をもつ。規模：通常 2ha 以上、特にスポーツに関し公式な試合も開催可能)に規定。</li> </ul> <p>＜整備方針＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1848 年に原住民であるマオリ族に対して食料確保の場としての利用を認める協定を結んだものの、実現されなかった。それ以後、マオリ族によって公園内の利用を求める訴訟が起こったが、認められなかった。1872 年に地方政府によって公園の土地以外の土地をマオリ族に与える決定がなされたが、実際に行われたかの記録はない。</li> <li>・1860 年代に入ると庭園師が雇用され、植栽が行われるようになる。1866 年、庭園師エノック・バーカーにより、エイボン川に沿って蛇行した歩道がつくられ、歩道の片側には英国産の草本類を植栽するなど、造園の試みがなされた。また、1864 年に設立された新国土順応協会により、英国産の樹木導入やブラウントラウトの放流、ヨーロッパ産の野鳥の導入などが行われた。</li> <li>・クライストチャーチ市では、1875 年に美化協会が設立され、エイボン川およびハグレー・パークの緑化に寄与している。</li> <li>・ハグレー・パークの管理方針は以下の 2 点。 <ul style="list-style-type: none"> <li>□歴史的環境価値、景観の質、そして植生特徴を保護、推進</li> <li>□本来の環境やオープンスペースの質を損なわない形で娯楽やスポーツ活動の場となる空間を提供し、人々へフィジカルな福祉と楽しを提供</li> </ul> </li> </ul> <p>＜主な施設＞</p> <p>池、ゴルフコース、庭園、博物館、バーベキュー場、テニスコート、サッカー場、ホッケー場、ラグビー場、クリケット場</p> <p>＜利用状況＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・150 年にわたって、都心のオアシスとしてスポーツおよび文化の中心としても機能している。</li> <li>・数多くのサーカスやコンサート会場として利用されている。</li> </ul>			

隣接施設等の概要		
河川	名称	エイボン川 (Avon River)
	管理者	クライストチャーチ市

公園・隣接施設等に関わる主な経緯	
1855 年	地方政府によって永久に公園として利用することを定めた法律が策定
1863 年	エドワード 7 世の結婚を記念して、初めての植樹が行われる
1864 年	公園内に庭園を作ることを決定
1882 年	Great Industrial Exposition が開催
1855 年	大学 (Christ's College) に 9 acre (約 36,000m <sup>2</sup> )、病院 (Christchurch Hospital) に 13acre (約 53,000m <sup>2</sup> )、道路として 11acre (約 45,000m <sup>2</sup> ) の土地を提供
1897 年	ビクトリア女王の統治を記念して公園北部に池 (Victoria Lake) が作られる
1904 年	ニュージーランドでの万博が開催され、建物が建造される
1930 年	経済不況により、ハグレー・パークは区分農園となる
1946 年	政府、市の合意によりハグレー・パークと植物園が市に移管される
1971 年	クライストチャーチ市のリザーブ権限法が通過
2006 年	計画を改定するにあたりパブコメを実施
2007 年	議会において 3 つの計画の素案を策定することを決定

公園・隣接施設等の位置・景観の状況

■位置図



出典) クライストチャーチ市  
 "Hagley Park/Botanic Gardens master Plan"  
 "Hagley Park Management Plan"

## 連携の内容

### ◆ 1 管理運営段階における河川との連携：河川の利活用を含めた公園の維持管理に関する計画の策定

#### <連携の背景・きっかけ>

- ・リザーブ法 (Reserves Act 1977) に基づき「レクリエーション保留地」に指定され、エイボン川周辺を含む公園のほとんどがオープンスペース、一部は保全区域に区分されている。
- ・ハグレー・パークはクライストチャーチ市街地の中心を流れるエイボン川に沿って立地し、クライストチャーチ市民のレクリエーションの場であり、観光の中心ともなっている。

#### <連携の手法・工夫点>

- ・ハグレー・パークに関しては、クライストチャーチ市議会によって計画 (Hagley Park/Botanic Gardens Master Plan, Hagley Park Management Plan) が策定されている。これらの計画に基づき、エイボン川を含むハグレー・パークの一体的な景観形成、一体的利用が図られている。

#### ■“Hagley Park/Botanic Gardens Master Plan”

- マスタープランでは、本計画の策定の目的のひとつとして、エイボン川等を含む隣接エリアとの一体的な計画とマネジメントを行うことを掲げている。
- また、マスタープランで計画されているプロジェクトの中に、ハグレー公園の南エリアにあるエイボン川の2つの支流 (Riccaton Stream, Addington Brook) に関連するものがある。生態系保全及び公園活用の視点にたち、支流の再生へ向けて植栽事業等の事業を実施するとしている。

#### ■“Hagley Park Management Plan”

- 公園内での商業活動 (Commercial Activities) に関する方針の中で、エイボン川との連携について触れられている。エイボン川の水面を活用し、カヌー、パント船、パドル・ボートなどのレクリエーション活動を提供するとしている。
- 自然資源としてのエイボン川についても触れられている。エイボン川及びその支流の河岸浸食をコントロールするとともに、水際へのアクセスを確保し、川の視覚的なアメニティを改善することを目標としている。

#### <連携の効果>

- ・エイボン川は緩やかにハグレー・パーク内を流れ、護岸は公園内に広がる芝生と連続し、広い芝生に点在する大木とともに、イギリスの田園風景を模した景観が広がる。
- ・エイボン川の水面はカヌーやパンティング (舟遊び) にも利用され、水辺では野鳥の姿も見られ、水と緑の美しい景観を創出。

#### <参考文献>

- ・クライストチャーチ市ホームページ (<http://www.ccc.govt.nz/Parks/>)
- ・クライストチャーチ市 “Hagley Park/Botanic Gardens Master Plan”
- ・クライストチャーチ市 “Hagley Park Management Plan”
- ・杉尾邦江「英国植民地時代のオーストラリア、ニュージーランドにおける公園緑地帯の形成に関する研究」(2000年)
- ・杉尾邦江「ニュージーランドに於ける公園緑地の成立に関する研究」(造園雑誌 56 (5)、1993年)
- ・財団法人砂防フロンティア整備推進機構／世界のグリーンベルトに関する調査業務報告書 (2000年)

#### <ヒアリング調査先>

The Christchurch Botanic Gardens, Christchurch City Council